

70
118

The Twelve Men of Letters.

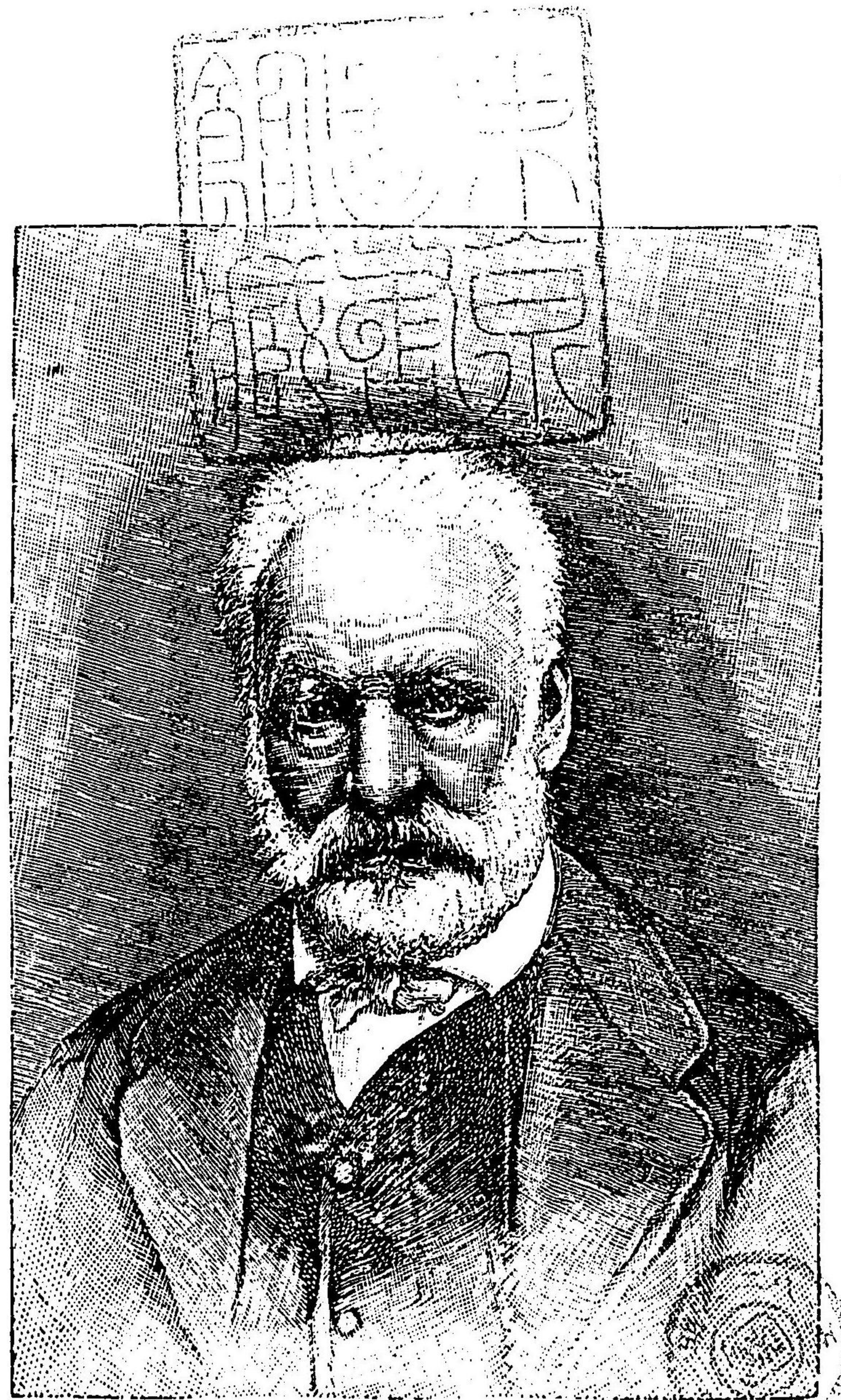
豪文貳拾

第九卷

人見一太郎著

工一ゴ一

東京民友社出版



ウヰクトル ユーゴ

緒言

昔者パルラシアス一朶の葡萄を描き、鳥雀來り啄む、美術の妙實に斯くの如くならざる可らず。余のユーゴーを描くが如きは所謂虎を描て猫に類するもののみ。望むらくは天下の識者、教を垂れ、誤を正し、更に余をしてユーゴーの眞面目を描き出すの幸を得せしめよ。

日清平和條約交換の日

大森八景坂に於て

鈴浦漁史

ウ井クトルユーゴ目録

如何なる時代に生れたる乎	一
如何なる血を受けて生れたる乎	一二
如何にして生長せし乎	一八
戯曲家としてのユーゴ	九七
詩人としてのユーゴ	一四三
小説家としてのユーゴ	一六七
ユーゴと政治及社會	二〇六
ユーゴの家庭及其死	二九七
ユーゴの文を論ず	三一七
ユーゴの人物を論ず	三二〇

ウ井クトルユーゴ一年譜

千八百二年

二月廿六日佛蘭西パサソンに生る。

千八百七年

伊太利に旅行して、詩思を助かし、『ユーマニター』の光に撃たる。

千八百八年

巴里フラジャンチヌの庭園に住して、天然、尙偶、慈母、將軍の四者より各種の感化を受く。

千八百十一年

西班牙に赴き、西班牙少年と戦ふ。フナジャンチヌに歸りて、未來の妻たる小女と相識ふ。

千八百十三年

セルシユミター街に在りて、拿破崙の没落を喜び、路易十八世を歓迎す。

千八百十五年

拿破崙エルマより佛に入り、ユーゴの父職に復して

千八百十七年

ユージェー『コルゲエルドコット』中學に入る。
佛國學士會の懸賞詩に應じて奇才一世を驚かし『ロ
マンチック』の泰斗シャートーブリヤンの識認する所
となる。

『バクシャルガル』を作る。

千八百十八年

父より學資を絶たれ學校を去りて母と同居す。

千八百十九年

二兄と共に『保守文學』を發刊す。

千八百二十年

『ローマンチック』の勇將ラマルチンと交を結ぶ。

千八百二十一年

拿破崙第一世死するの翌月ユージェーの母死す。

千八百二十二年

『オードエバラット』を發刊して七百フランを得路易王
より年金一千フランを受く。
情人フナーセー嬢と結婚す。

千八百二十三年

『パンサーランド』を著はし、シャールニスノーガエと交

る。

千八百二十五年

シャールニス王より十字勳章を授かる。

千八百二十七年

『クロンウエル』を著はして新生涯に入り、地位隆然と
して登ゆ。

千八百二十九年

戯曲『マリヨンドロム』を作り、シャールニス王より禁止
の命を受く○年金増加を拒絶す○『死刑者最後の日』
を著はす○『東方の詩』を公にす

千八百三十年

『エルナニー』を興行して、『クラシック』と激戦す○革
命の光に觸れて、王黨より哲理上の共和黨に進轉す。

千八百三十一年

『ノートルダムダマリ』を公にす○『マリヨンドロム』を
興行す。○『秋葉』を著はす。

千八百三十二年

『ルアザミューズ』を興行して、ルイフネリツプ王より
禁止せらる○總ての年金を辭す○『リュートクレホルツヤ』

を演じて大勝利を得。

四

千八百三十三年

『マリーリーチエードル』を興行す。

千八百三十四年

『フロードギュー』を著し社会主義を唱ふ。

千八百三十七年

『内部の聲』を著す。

千八百三十年

『リニイブラ』を興行す。

千八百四十年

『光及蔭』を著す。

千八百四十一年

學士會員となる。

千八百四十三年

最後の戯曲『レヒルグラープ』を興行して失敗す。○長

千八百四十五年

女レオホルダンヌを失ふ。

千八百四十八年

貴族院議員となる。

千八百四十九年

代議士に撰出せられ、穩和共一黨として立つ。○死刑廢止の運動を爲す。

千八百四十九年

幾多の人を死刑より救はんとして。○急進共和黨となる。

千八百五十一年

路易拿破崙の陰謀を看破し、小拿破崙の號を興ゆ。○拿破崙のクレーターに逐はれて、北耳義に逃る。

千八百五十二年

『小拿破崙』を著して拿破崙の罪を正し自耳義よりセルシーに追はる。

千八百五十三年

『刑罰』を著して第二の大打撃を拿破崙に加ゆ。

千八百五十四年

タプ子を救はんとしてパーメルストンと争論す。

千八百五十五年

英國が拿破崙と聯合する非のを鳴らして、セルシーより更にゲルンセーに追はる。

千八百五十六年

『黙思』を著す。

千八百五十九年

亞米利加の義人アラオンを救はんとして書を亞米利加に送る。○『各時代の物語』を著す。

千八百六十年

セルシーに赴きガリバルダの爲めに自由獨立の爲めに演説す。

五

千八百六十二年 『悲慘』を公にして成効の頂上に達す。

千八百六十五年 『市及森の歌』を著はす。

千八百六十六年 『海の勞力者』を著はす。

千八百六十九年 『笑ふ所の人』を著はす。

千八百七十年 二十年の流より巴里に歸へり、國民議會の代議士に撰

舉せられ主戦論を主張す。○議會がカリバルターの撰舉

を否認するに及んで辭職す。

千八百七十三年 『恐るべき年』を公にす。

千八百七十四年 最後の小説『九十三年』を著はす。

千八百七十七年 『祖父たるの道』を著はす。

千八百八十一年 『精神より出る四個の風』を公にす。

千八百八十五年 八十三年を以て没し、國葬を以て貧民の柩車にてグレン

デオン寺に葬る。

著者の舊著作

平民政治

英國内閣大臣たり、國會議員たるブライス氏が著はしたる『アメリカンコ
ンモンウェルス』の翻譯也。紙數二千五百三十四頁、二年の勞作より成る。
此書の十九世紀尾端に於ける超群の大著述たるは世界の公評也。

第二の維新

明治二十六年二月藩閥と民黨との衝突愈激しく第四議會正に解散せられん
とするの形勢を現し、天下亦大に變する所あらんとするに當てや、著者は
藩閥と民黨との正邪を判決する爲めに『第二之維新』なる一小冊子を發行
せり。是れ只時勢の急に應ずる爲め、僅々七日間にして作られたる者也。

國民的大問題

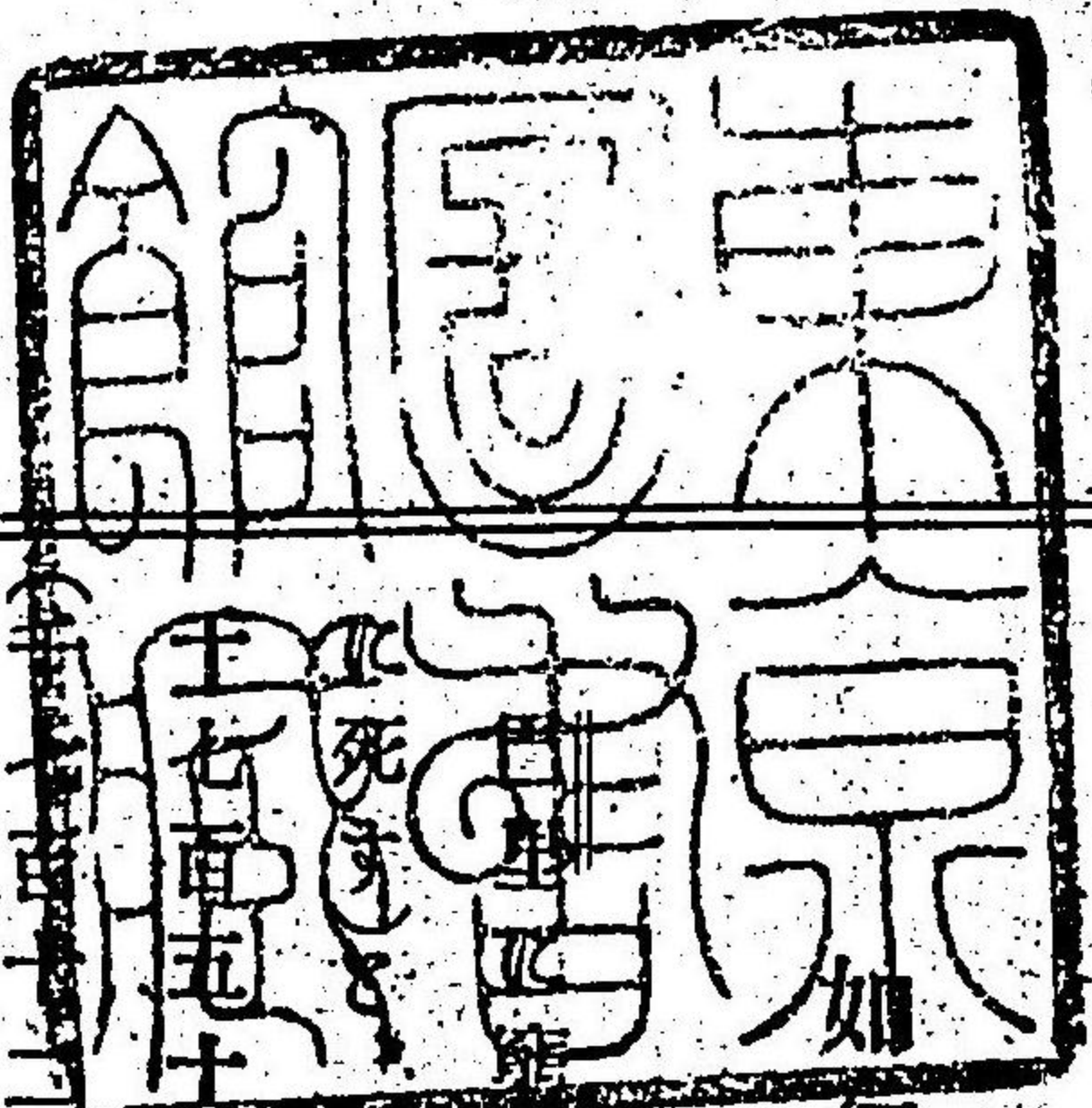
此書は著書が明治二十六年三月三日より六月十三日に至る『國民之友』の

社説として掲載したる『條約改正論』を改作したる者也、此書一たび出るや、外字新聞は争て之を紹介し、之を評論し、在留外人を動かしたるも少なからず。曾て東京『タイムス』の主筆として、又た臺灣征伐の従軍者として、知られたる米人ハワース氏の如きは、之を讀んで頗る同情を表し、著者を訪ひて交を求むるに至れり。

二

ウ井クトル、ユーゴ

人見一太郎 著



何なる時代に生れたる乎

一
居せる書記生の兒(千六百九十四年に生れ千七百七十八年に死す)と、
ノレイド城中に生れたる貴族の兒(千六百八十九年に生れ千七百五十五年に死す)と、
ゼネーアの陋巷に住みたる時計師の兒(千七百一十二年に生れ千七百七十八年に死す)とが、時代に遺したる三箇は年と興に流れたり。
年は千七百八十九年となれり、三箇は、ユーゴの所謂『深き海』

一

となれり、即ち革命となれり。

ボルテールの遺したるものは偏僻打破の大精神也、貴族、僧侶、地主を打て、社會平等の一丸となす、是れボルテールなり。「シロングン」、「ジャコベン」、「コンスチチュアン」、「モンタギヤル」、其性質には緩急の差あるも、根本的大精神は皆な同くボルテールより流れ來らざるはなし。

モンテスキューの遺したるものは、政法組織の智力なり。革命黨中、重きを憲法制度に置き、性行自らモンテスキュー彼れ自身の如く和平なる「コンスチチュエアント」黨、「フナ井ヤン」會社等は、モンテスキューの系統に屬す。

ルソーは大事業の創作力たる信仰を遺せり、空拳を揮て新乾坤を開拓し、理想的黄金時代を仰て疾走するものは、ルソーの徒也。

革命黨中ルソーの如く、最も過激の性質を有する「モンタギヤル」黨、「ジャコベン」社はルソーの血滴再び革命の皮肉中に熱拂せる者。

若し彼等の影を革命の時代に求めん乎、千七百八十九年五月五日、三民議會の設立より八月四日諸特權廢止に至る、破壊的の時代はボルテールの時代也。

千七百八十九年八月四日より千七百九十一年六月二十日路易王の出奔に至るの間は最も盛に憲法制度を講究したるの時期にして、即ちモンテスキューの時代也。

千七百九十一年六月二十日より千七百九十四年七月廿八日ロベスピエールの死に至る酔理迷想の時代はルソーの時代といふ可き也。若し彼等の影を革命の人物に尋ねん乎、ミラボーは、ボルテール

の變形也、セイエはモンテスキューの變形也、ロベスピエール、ダントンはルソーの變形也。

之を要するにボルテールは舊屋を破壊せり、モンテスキューは、材料を撰擇せり、ルソーは、新家を建てたり。ボルテールは、情の方面より革命を作れり、モンテスキューは法の方面より革命を作れり、ルソーは理の方面より革命を作れり。

此の如くして革命の大建築は成れり、去れどその革命は、不具の革命なりき、何となれば、情、法、理の方面の外に革命を作る可きの方面ありぞ、之を擔任するの普請奉行を缺きたれば也。

二

革命は人生の噴火山也、噴火山、何を以て、火を噴き石を降らす歟。彼れの火石には大趣意あり、曰く人類を地震より救はんとする

也。革命何を以て、血を流かし、肉を飛ばす歟、彼れの血肉には、大目的あり。曰く人類を壓制より救はんとする也。人生の噴火山か、始めて佛國に爆發したるは、千七百八十九年にして、最も盛んに火石を噴出したるは、千七百九十三年なり。千七百九十四年の後に至りては、只時に力なき噴烟を見たるのみ。彼れか此間人生に與へたる功德は如何。彼れは果して其大目的の幾分を達するを得たる乎。請ふ吾人をして之を數へしめよ。

- 第一 政治上に於ける階級的區別を廢したる事
- 第二 兵力を人民の掌中に握りたる事
- 第三 人民に抵抗する者は總て之を叛逆者とするの新定義を立てたる事
- 第四 藩地裁判、實官、打獵權、什一税、贖罪金、鳩屋權等の特權を廢したる事
- 第五 一局議院制を實行せし事

- 第六 僧侶の所有地を政府に没入せし事
- 第七 貴族的警察制度等を全廢したる事
- 第八 地主たりし僧侶を俸給取りに改め僧官を平人より擧げし事
- 第九 王なくして内はよく自ら治め、王なくして外はよく同盟軍を破り、明らかに國民の主權を確定したる事
- 第十 純乎たる共和制度を立て自由、平等及兄弟の三忍義を實行せし事
- 第十一 信仰出版集合の自由を認識せし事
- 第十二 公義、信誼、正直、節儉、忠厚等平民的道德を奨励したる事
- 第十三 農工等に大振作を興へたる事
- 第十四 自由共和の精神を白耳義、和蘭、瑞西、日耳曼聯邦に及ぼしたる事

熾火山は、全般に於て人間を救ひ、一部に於て、無罪を殺す。熾火山の恐る可きは、無慈悲に在り。革命の缺くる所は、『ユーリマニラ』に在り。吾人は更に革命の暗黒を語らん。

路易十六世は善柔の王也、在位十六年の間、善に志し治を圖る。即ち、只輔弼に誤られて人民に抗したるに在り、廢位禁錮は以て總ての罪を償ふに足る。而して革命は彼れをしてダンブルの獄中ヒュームの英國史を編て運命の類似者を求むるの自由すら與ゆるを許さざりき。

容親花の如き王后マリアントワットは其心塞の如くなりき、路易十六世を眼かじめたる責は固より幾分か之れあり、然れども囚獄の苦は其罪跡を拭ふて餘あり、而して嵐は花を散らせり、革命は女子を殺せり。

勤王黨は固より四境に迫る、同盟諸國と相通して、革命を妨げんことを企てたり、禁錮は此の隠謀を止むるに足るものありき、而して革命はマラーナ頭に戴ける府廳をして劊手三百人を以て三日間王黨の首を斬らしめたり。

『シロン』は革命の功勳者也、中等民族をして、主貴族僧侶に勝たしめたるは彼黨の功なりき、王位を廢して共和國を樹立したるは彼黨の力なりき、革命の罪惡に反對して、夫の三日間の罪惡を非難したるは彼黨なりき、路易王を死の宣告より救はんことを彼黨なりき。彼黨の中に其性質思想最も自由主義に適したるローランあり、試見あり、氣力あり、『シロン』は黨の精神となり、其夫の助言者たるローラン夫人あり、

明敏なるベルギヨ一あり、シヤンソンチ一あり、最も世界的眼光を有せる大新聞記者ブリツツ一あり、彼等は歴制、特權に打勝ちたる凱旋者として、月桂冠を戴くに足る者也、而して革命は、彼等を始めとして、ゾロンドン、黨の重なる二十餘人を殺るとし、七十餘人を禁錮して全く彼黨を滅ぼしたり。

理想的平民政治を實在に活現せしめたる千七百九十三年の憲法は實に「モンタギヤル」黨の作る所也。「モンタギヤル」黨は純乎たる共和論者なりき、純乎たる平民の友たりき、其中には殺戮を好むものなきにあらざるも、其巨魁ダントン、カミイユラム等の如きは、殺戮を嗜まず、委官政治を欲せず、恐嚇政治を欲せず、彼等は寧ろ自由と正義を目的とする者なりき。「我は斬る人とならんよ、りは寧ろ斬る者とならん」とは斷頭臺がダントンを離かんとする時にダントンの赤心より出てたる言葉にあらざるや。而して革命は、又た彼等の生命をも奪ひたりき。

ロバスピエルの恐嚇政治に至りては、殆んと言語に絶す、巴里の斷頭臺は日々五六十の頭を載せざるはなく、リヨン、ツィロンに於ては、無罪の民、絞殺に遇ふもの其数を計る可らず、特にナントに於ては、斷頭臺

を用ゆるを緩慢なりきして多くの人をロワル河に沈めたりき。而して、殺されたる人民は、王黨のみにおらずして、同く共和黨なるもの少なからず。之を要するに、始めは中等民族をして、王僧侶貴族を殺さしめ、後には、賤民をして中等民族を殺さしめたり。始めは共和黨をして王黨を殺さしめ、後には、共和黨互に相殺るすに至れり。

是に於て乎、反動は來れり。

三

反動は革命の暗黒に反對せんが爲めに來らずして、革命の全軀に抵抗せんが爲めに來れり。革命の缺を補ふが爲めに來らずして革命の長を壞るが爲めに來れり。

千七百九十四年七月廿八日ロバスピエルの死後一月にして賤民日々の集合を禁じたるは反動の第一着手なりき、之に次て僧侶、貴族放逐令は取消され、脱走人は、肩、風を切りて歸り、巴里全市勤王黨の右に歸す、没收したる財産は其持主に歸され、千七百九十三年の憲法は全く反古と

なれり、無慈悲は、無慈悲に報はれて、共和黨は到る處に殺戮せられたり、就中、王黨が共和黨を殺るし、共和黨は到る處に殺戮せられたり、樓の上より共和黨を投げ落さし、ロイン河畔の岩石に觸れて死せしめたるが如きは、最も殘忍の所業なりき。蹈舞、遊蕩、宴會、驕奢等貴族的現象は、反動と共に再來せり。千七百九十七年五月に至りては、勤王黨は立法部行政部に恐るべき位置を占め、五百議院及元老議院の議長は與に勤王黨の占有する處となれり、羅馬舊教の特權を復するの動議すら早や公然議院に提出せられ、殆んど通過するの勢となれり、同年九月に至りて、總官は、一時勤王黨に打勝ち、反動に打勝ちを得たりき雖、千七百九十九年の始に至りては反動の大勢は、更に潮の如く勤王黨は再び其頭を上げたが、而して王黨は思らく、共和政府倒れブルボン家を王位に復するの時機愈近けりき、彼等又た謂らくナポレオン・ボナパルトは王政を復古すべき佛國のモンクなるへしき、千七百九十九年十一月に至りて、反動の機運に乗したるボナパルトは革命に向て、一大打撃を與へたり。ボナパルトは兵力を以て議院を解散せり、憲法、代議政は全く彼れによりて破壊せられぬ。千八百二年の二月即ちユイゴーガ此世に生れたる時に至り

ては、貴族階級は國內に横行濶歩せり、皇帝の位、王者の威儀、貴族、僞侶二種類の復舊等は已にボナパルトの腹中に孵化し、眞個の共和黨を刈り盡し、外、光榮を輝かし、内、民法刑法の制定等を以て一般人民を籠絡せんとしつゝありき。而して敗殘の眞個共和黨は、ボナパルトの野心を看破したれども正々堂々彼に抵抗するの力なく、僅かに陰謀を以て彼を除かん企てつゝありき。革命と反動とは、斯の如くして、戦へり。而して反動は、活ける拿破崙と與に力を合せ、死せるボルテール、モンテスキエー、ルソーと同盟せる革命と戦ふて殆んど之に打勝ちたりき。去れど其結果は只火を以て火を救ふに過ぎざりき。革命の缺くる所の者は依然として存したりし、革命の缺くる所の方面を擔任すへき普請奉行は、依然として、其人を得ざりき。而してウヰクトルユイゴーは恰も、此時に生れたり。

如何なる血を受けて生れたる乎

ユーゴの家は、佛蘭西國の縮圖なりき。父は、革命を代表せり、母は反動を代表せり。ウ井クトルユーゴの搖籃は、家に置くも、國に置くも、同く革命と反動との間を去來せるを得さりき。

紳士としては、誠實にして率直、將軍としては勇膽にして善謀、革命家としては主義あり、節操あるものは是れ彼れの父なりき。父の名はセウセフレオポールドシシニスベル、ユーゴといふ、ローレンスの産也。彼れの祖父は名もなき貴族也、彼れの父は只正直一徹の匠人也。彼れの姉妹の一人は麵包師に嫁し、他の一人は理髮師に嫁し、他の一人は裁縫師也。

シシニスベルユーゴは、革命軍の勇卒なりき。千七百九十三年に於ては、大尉として、革命の敵と戦へり、彼れは又た屢々クンデの王黨と戦へり、彼れは、ミユスカル將軍と與にカポチエルの森林中に王黨の勇將シャイレットを擒にせり、ロベスピエールが恐嚇政治を行ふの時に當てや、彼れは恐嚇政治中の恐嚇政治を行ふたるカリエルの書記なりき。カリエルは革命的人物中、残忍の點に於ては第一位に位すべし。彼の側に置けばマラー、パレルも寧ろ多情の人なりき。彼は王黨の根據たるパンデーに近きナントに其の斷頭臺を置きて、パンデーの王黨を壓にせんと欲したり。彼れの血を好むは斷頭臺よりも甚だし。その人を殺すの愈繁多なるに及んで、彼れは斷頭臺を擲て、斷頭臺よりも残酷の方法を執れり。彼れは底に水を入るべき仕掛の船を作り、人民を其中に滿載して、ロアル河に沈

めたり。而してシジスベルユーゴーは此殘忍を行ふたる助手の一人にてありき。此の殘忍なる境遇は、幾何か、彼れの血を冷かにしたる可し。去れど彼れが此の境遇中に在りて、ナントの頑固なる王黨の船主をして其女を彼に許さしめ、勤王主義に熱心なる彼女をして、其の身を彼れに許さしめたるの一事は、彼れの心情、氷に包まれて猶ほ暖かに、嵐に圍れて猶ほ穩かに、超然として境遇に染まず、カリエルに感化せられざりしを證明するに足らずとせん哉。

シジスベルユーゴーは、其面上の廣額、深目とをユーゴーに傳へたると同時に、革命と共和の種子を豐饒なる其兒の心裏に下せり。父が更に其兒に傳へたるべしと思はるゝは、清廉也、義俠也、氣節也、文才也。

シジスベルユーゴーの文才ありしは、その武人に似ずして、著作

少なからざりしを以て知る可し。或る外國政府巨額の資を捧げて、彼れが築城上の著作を出版せんとを請ふや。彼れの節義は怒て之を退けたり。其友ラホリー將軍、拿破崙一世より逮捕せられんとするや、彼れの俠氣は、門戸を開て將軍を隠匿せり。彼れの同役は、王政回復の後も、軍職に服し、或る者は千八百三十年に至り、或る者は千八百四十八年に至りたるにも關せず、路易十八世は、彼れを副總督に昇任せんとしたるに關せず、彼れの清廉なる操行は千八百十五年、ナポレオン没落と與に其職を辭して悠々然たり。此の文才、此の節義、此の俠氣、此の清廉は、殆どよく父に似たる廣濶なる前額の中に入りて、父のものより大なるものに成長せしならん。

有名なる『零落』の著者コンスタンフランソア伯爵を伯父とし、熱心なる舊教の信者にして舊教の辯護者たるを祖父とし、『アルボン』

家の忠臣たる極めて、律義正直なる船主を父とするもの、是れユーゴの母なりき。

賢明にして而も忠實、温和にして而も大膽、才智あり、教養あり、貞操あり。實に中等民族の母たる典型といふ可し。彼女は王黨の根據地ペンテリの隣地ナントに生る、カリエルの斷頭臺、溺殺船は、其親く見る所也。王黨を父として此に生る、其死に至る迄、王黨たり、反動黨たるもの蓋し怪しむに足らず。

彼は政治上に於ては其見を誤るべき反動の代表者なりと雖、其宗教上に於ては、他の王黨と異なる所あり、彼女は、他の王黨の如く舊教を信せざりき、彼女は宗教を信せずして寧ろホルテールを信じたりき。彼女は政治思想に於ては、壓制を其見に加へたりと雖、信仰の上に於て自由を其見に與へたり。

ユーゴの兄弟皆な文才あり、兄ユーゼンヌの如きは、『ドノット』學校に於てユーゴと犄角相争ふ程なりき。彼れはツールズに開ける千八百十八年五月の競争會に詩を送りて、名譽ある『金箋花』を獲たり。彼は又『保守文學』に多くの詩文を草せり。長子アベルの如きも文學の趣味深く、拿破崙没落後は兵劍を擲て巴里に歸り、二弟と與に文學上の意見を上下したり。之によりて之を見ればアレクサンニユとローレンヌの血によりて成れる兒童の血管中には必ずや、先天的に文學の潜伏せるものありし歟。

如何にして生長せし乎

「斯の世期、二年を過ぐる時、城郭嚴めしきベサンソンに、一小兒生る、小兒は死ぬる爲に世に來りたるが如くに脆弱なりき、世に其類なき程に柔軟なりき、眞に只一個の幻空のみ、然り全く虚無なる物なり。之を長育するは、母の考に於て覺束なきなり。その眠るや、其頭を胸に俯着す、殆ど棺の中に安息するが如し。此小兒は、余にてありき」とは、ユーゴーが『秋葉』中に自ら語る所也。誰れか知らん、此の虚無に似たる一小兒が、未だ二十年を経ずして、一個の文學者、一個の紳士、一個の人間に生長し、未だ三十ならずして、佛國第一の文學者となり、世界の文文學者中に其籍を列するに至らんとは。

ユーゴーの生涯は漂泊を以て開く。彼れ千八百二年二月ベサンソンに生れて未だ六週ならず、忽ち征路の人となり、流離の客となり、ベサンソンよりマルセイユに行き、更らにエルペ島に移り、更にポルトフェルラヨヨよりパチチャへ飄泊せり。浮木の波に従ふて漂ふが如く漂泊武士たる其父に従ひつゝ。

シサベルユーゴーは、漂泊頓沛を以て、家族を苦しむるに忍びず、千八百五年の終、彼等を巴里に送れり、千八百六年の始め、シサベルユーゴー夫人は、ウ井クトルユーゴー及び他の二兒と與に巴里、クラシー街に其寓を定む。ウ井クトルユーゴー生れてより、此時に至る五年間の漂泊生涯は、只浮雲の天空を往來するか如く、無心無意に過こされたる可しと雖、彼れの少年の作たる詩句の中に、は、彼れの搖籃が、屢陣大鼓の上に安せられたると、彼れは兵卒の

兜の中に盛られたる小河の水を呑みたる時、眠れる彼は古く摩擦せられたる軍旗を以て掩ひ包まれたることを述ぶ。是れ後日母より聞き得たる所なるにせよ、多少文學的誇張あるにせよ、此の五年間の轉蓬藻流は、彼れの精神に幾何かの詩歌的音響を與へたるや亦疑を容れず。

ユーゴーの記憶が曙光を發射したるは、彼れが兄と與にクリシイ街の寓居よりモンブラン街の小學に通ひたるの時に在り。彼れ纖小虚弱、且に學校に上るや、常に先づ教師の女ロイズ嬢の臥床の上に安んせられ、嬢と化粧臺とを凝視したる時は、彼れがおほろげに記應する所なりといふ。彼れは又た彼れの寓居の庭に一匹の山羊あり、よく垂れたる楊柳あり、井の側に家蓄の水桶ありしとを記憶すと自白せり。彼れの性質は此時、沈鬱にして執拗、彼の母より外彼れを

微笑せしめ得るものありき。

ユーゴーが陣大鼓の上に嬉笑せる間に、拿破崙朝は立てられ、世襲貴族は立てられ、革命の大建築は、半は破壊せられ、而してポナバルトを以て、王政を復古すへき佛國のモンクなりと思ひたるものと、ナポレオンを共和に忠實なりと思ひたるものとは、俱に與に失望せざるを得ざりき。去れど軍人生涯を續けたるシジスベルユーゴは、名譽を以て軍人を優待する拿破崙の新朝と相反く能はざりき、特に一世ナポレオンの兄テンプルスの王ゼーゼフポナバルトは彼の舊知己也。彼れは勢、ゼーゼフの招を辭する能はざりし也。彼れはゼーゼフの麾下に屬して中佐に進み、王黨の首領リアボラと戦て之を擒にせり、ウヰクトルユーゴーがロイズ嬢と化粧臺とを凝視したる間に、彼の父は戦功を積りて聯隊長となり、伊太利アウヰリノ州の知

事となれり。

旅行は生長なり、五歳の小兒、ウヰクトルユーゴの伊太利旅行も亦た一の生長なりと認めざるを得ず。

千八百七年十月の終、ユーゴは、母及兄と與に、父を伊太利の任地に追はんと欲して、巴里を發せり、古怪なる乗合馬車の裏、斜風細雨、故國を去り、輕協に駕して、雪深く鎖せるサニール山を跨り、又乗合馬車によりて、バルマ、フロレンスを過ぎ、古代文明の遺跡、羅馬を過ぎ、秀美なるチーブルを過ぎ、父の任地アウエリノに抵れり、其間如何に五歳の小兒は天然の風光に感觸する所ありし乎。其友アレキサンドルヂユーマの回想録は其一斑を記して曰く。

余が十五回又は二十回の旅行を終つて伊太利より歸るや、只曾て一回伊太利に旅行したるユーゴは、優美なる伊太利の犬なる光景を語りて詳

なるを、彼は殆ど余と與に總ての旅行に伴ふたものゝ如く然り。然れども彼れは實物に就ては語るを密ならず。只實物に聯絡して、偶然に生じたる光景に就て語るを多し。

ヂユーマはユーゴに長する一歳、歴史的小説家の王と稱す。而して彼が長年數十回の旅行は其得る所に於て、ユーゴ幼年一回の旅行と相匹すとせば、ユーゴ五歳の頭腦は如何に神妙なりといふ可き乎、而して彼れが實物よりも寧ろ實物に聯絡して生じたる風光に感じたるが如きは、已に自ら詩人の雛兒たるを語る也。

小旅行家の行李は、更に大なるものに満たされたり。車、巴里を去りて隣々として走る所、目を舉げて窓外を望めば、髮蓬々として亂れ、面は青黒、土色をなしたる王黨の屍體、幾個となく歷々、幽靈の如く路傍の樹木に懸るを見たり。是の如き慘狀は小旅行家か、

生れてより始めて、見たる所、彼れの罪なき心は實に激く之に墜たれたり。彼れの心裡に潜める『ユーマニター』は、此の一大刺激に由て、一大生長を爲したるべしと推斷するも、それ或は不可なからん歟。

アウエリーの生活は、ユーゴに於て、小兒として快樂の頂上なりき、流離せし父母兄弟は始めて一堂に會して樂めり。大理石を以て作られたる其邸宅は、旭に夕日に美なる光を放て、漂泊兒の眼を喜ばせたり。家の園りには幾株の草木あり、兒等の最も喜ひし所。家の傍には叢木を以て掩はれたる穴道あり、ユーゴ兄弟は日課の如く此に來り遊んで、木實を拾ふを樂みとなせり。之より外に又兒等の最も樂みたるは巨木の盤根大地に匍匐する所、圓額豊頰の偉丈夫に抱かれて勇ましき手柄話を聽くの一事にてありき。

ゼウセフポナバルト、チープルス王より轉して西班牙の王位に即くや。生別の苦は再ひユーゴに來れり、父は王に從て、マドリットに行けり、ユーゴ及二兄は、母に從ふて巴里に歸れり。是れ千八百八年にして、ユーゴ六歳の時也。巴里に歸るや、母はフナ井ヤンチンヌに住所を定めぬ。此所たる大樹、鬱鬱森を爲し、遠く望めは雲の如し。丹花碧葉相映照する所、鳥歌ひ、蝶亂れ、幽寂靜平、市の市たる、巴里城中、別に天然の一乾坤を作す。實に以て風雛を養ふの栖巢に適す。千八百七十五年に出版せる。ユーゴの著『流瀆前』中。フナ井ランチンヌの生活を語りて曰く。

『此の世紀の始め、巴里の最も荒涼なる區域の中に、大なる庭園によりて包繞せられたる大なる邸宅あり。一小兒其中に住す、此邸宅たる革命前は、フナ井ランチンヌの寺院と呼ばれたり、此小兒は、只母及二人の兄弟と與に暮せり。其邸宅の他の室には、一老僧在り。彼れは古し僧侶會

職の職員にして、今猶ほ九十三年の革命に費す、彼れ曾て迫害に苦し
 みたれども、今や極めて自由にして、老年を送り、歴史の大綱を教授するなり。
 等に多くの羅句を、少希の語を、歴史の大綱を教授するなり。
 庭園の奥深く繁る巨木に掩はれて、牛は廢壞せる古き會堂立てり、
 兒等は此會堂に来る事を禁せられ、牛は廢壞せる古き會堂立てり、
 『第一帝國の下、此邸宅に三人の兄弟成長せり。彼等は一つに遊び、一
 に働き、春の兒をみて、只書冊、植木、雲霞に心を止め、鳥の騒がしき歌
 に耳を傾くるのみして、將來の運命には全く管する所なくして、亂暴に
 暮らしぬ。去れど彼等は常に柔なる微笑に、より愛護せられたり。祝福
 あれ、噫我母よ！』
 『フナ井ランチンヌの此の邸宅は今や彼に於て貴重、神聖の記也。此邸
 宅は野蠻なる影の如くして彼れを蔽ひたり。彼の精神は日光さへ
 ラさの間に不思議なる開發を爲したり。何者か花を以て掩はれたる此の
 零落より平和なるものあらんや、曾て寺院たり、今は寂寥たり、常に陰
 影たり。』
 『我生涯は花の間に過ぎぬ。フナ井ランチンヌの花園の中に余は蝴蝶や蜂

彼又た後日フナ井ランチンヌを歌ふて曰く。

戯れ、草花を摘み、小兒として遊び、青年として漂ひ、我母と二人
 の兄弟と、腕に書を挟める善き老僧との外、他に何人も見ずして過ぎ
 ぬ。』
 『時として、禁を犯かして、余は園の奥、樹木鬱鬱として茂れる所に進
 み行けり、鳥くもの獨り風あり、聲あるもの獨り鳥集あり、生々として
 立つもの獨り樹木あり。木葉を透ふして、庭寺を見る、鳥は窓の内外に
 飛へり、鳥は零落を家さす。神さ鳥さは同棲す。』
 余は幼時、三個の師を有したりき、花園、老僧及我母。花園は大きく、深
 く怪なりき、異形なる高壁は四に回り、花は開き、虫は飛び、種々の音
 聲は響きたりき。その中央は殆も原野の如く、其奥は殆も森林の如くな
 りき。その中にタシットとホームルを愛讀せる僧と柔らかなる老女あり
 き、老女は實に我母なりき。斯の如くして余は三個の光の下に成長せり
 (千八百卅九年の作「内部の聲帯」に在り)

三個の光は三個の目的を有す。

天然は、彼を詩人となさんと欲し、老僧は彼れを舊教徒となさんと欲し、老母は、彼れを王黨となさんと欲す。

第一は、朝に夕に彼れの詩藝文藝に、美と、清と、高と、大とを盛り、是れ甚た善し。

第二に至りては、頗る危険なりき、老僧は、革命後の小兒を革命前の小兒に歸さんせり、彼れは小兒をして、羅馬舊教を信ぜしめんとし、羅馬法皇を拜せしめんとし、未來光明の兒をして、過去偏僻の墓に歸らしめんとし、革命と反動との間に、飄々として一去一來する搖籃をして、全く反動の有となさんとしたりき。ユイゴは『流謫前』中、之を記して曰く。

『教師たる僧侶は、ラリウキエル和尚と呼ばる、此名は人の取んで稱ふる所也。』

『此教育は少年の智能に、編備の老成を極ゆる也、小兒より曉を奪ひ去りて夜を興ゆる也。』

『人が少時の教育より逸脱するは、容易ならず、去れど僧侶的教育は、常に不治なるにあらず、實例、ホルテールに在り。』

『危険なる教訓に従ひたるフナキランチヌの三學生は、一婦人、即ち彼等の母より和かにして、高き道理を學びたるを以て僅かに、調和するを得たり。』

三兒中の最幼は猶ほ全くの稚童にして、當時『ウキルツル』の綴りを學びたりき。

ユイゴ、彼自ら之を言へるが如く、彼れを僧侶教育の危険より救ふたるものは、彼れの母よりも、宗教を信ぜずしてホルテールを信ずる彼れの母は舊教を惡めり。ユイゴ其兄ユイセンヌとマドリツの學校に在るや、其教師たる僧侶、羅馬教の供養を務めんとを求めしに、彼女は之を拒み、強ひらるゝに及んで、其兒等は新教徒なりと公言せり、且つ彼女は其子に讀書の自由を許したるを以て、

彼は、最もホルテールを愛讀し、又よくルイソを讀むを得たり、此の讀書と母とは實に僧侶の危険なる目的を妨ぐるの二大城壁なりき。

第三の光、母の目的に至りては、恐る可く成效せり。彼女は、詐りなき教育をもて、誤ある教育を施せり。彼れは、甘乳、穩言、實心、誠意に由りて、偏僻、頑迷、を教へたり。彼れは其兒に向て、斷頭臺を惡むと同時に、自由、平等、同胞の救世主たる革命を惡むへしと教へたり、王權の前には何の權力をも、其光を失ふへしと教へたり、革命によりて地に落ちたる王冠は、天の星の如く尊ひ仰く可しと教へたり。要するに母の目的は、其子を王黨とするに在りき、其子を反動の兒とするに在りき。

父の目的とする所は母の目的とする所に反對せしと雖、只膝に抱く

もの、感化力は、乳を與ゆるもの、感化力に敵す可くもあらず、况んや、父は常に漂泊して多く他郷に在り、其の兒を抱擁するの日に、少きに於てをや。故にフテ井ランチンヌのユーゴ一家に於ては、反動は、殆んど革命に打勝ち、ユーゴの思想は殆んど母の摸型中に凝結せんとせり。殆もよし。革命の援軍は、飄忽として、フテ井ランチンヌに來りぬ。

是れ何者ぞ。ラホリー將軍。ラホリー將軍何者ぞ、請ふユーゴの説明を聽け。

ラホリーは共和政治に殉したるフリツタニー州の紳士なり。彼れは同くフリツタニー人たるモロの友なり。彼はバンテードに於て我父を識れり、兩名相與に來因の軍に在り、刎頸の交を結へり。千八百七年ラホリーは、モロの隠謀に加はりたりと羅織せられ、其頭は千金を以て募らる。彼れは隱家を有せさりき、我父は其家を開きて彼を待てり。フテ井ランチンヌの教會堂即ち零落は、他の零落即ち打勝たれたる人を

保護するに宜しかりきラホリト、則ち來て陸の中に姿を隠しぬ。

吾等小兒は、彼れが余の教父たるの外はその何たるを知らざりき。彼れは、余の生るゝを見たり、彼れ我父に謂へり、『エーゴーは北方の語也、宜く南方の語を以て、之を和らく可し、羅馬語を以て日耳曼語を完ふす可し』と。而して彼れは余にウヰクトルの名を與へたりき。余は彼れの本名を知らざりき、我母は彼れを將軍と呼び、余は我教父と呼べり。彼れは雨や、雪や、ガラスなき窓より吹き入るゝに管するなくして、園の奥なる客落寺中に露宿せり。神聖の後背に殿臺あり、室隅にヒストルあり、一卷の『タシット』あり、彼れは余に此書を觀き示したりき。余は常に想起す、彼れが、余を膝の上に置き、『タシット』を開き、斯の如く説きたるを。若し羅馬にして、王を保持せしならば、羅馬は羅馬にあらず。而して彼れは、和らかに余を打眺め、再び説て曰く。兒よ、總て自由に服従せざる可からず。

エーゴーの教主たる落人は、暫らくして、捕へられ、又た暫らく

して銃殺せらる。その感化は長からざりしと雖、深かりき。エーゴーの思想は、其後遂に母に打勝たれたれども、其底には、打勝たれたるものありて時を待ちたりき。

北下

ラホリト獄に投せらるゝや、エーゴー夫人は間もなく夫を追ひ、兒等を拉し、西班牙に行かんとして、バイヨンヌに抵る。バイヨンヌは、西、佛の境に在り、是れより以往、佛の占領地といふと雖、其實は敵地なり。シヨセフポナバルトは其名西班牙の王たるも、其力の及ぶ所は、僅かに首府マドワットののみ、佛軍の劍光銃影の映する所のみ。其他の部分は總て一揆總て内亂。佛蘭西の婦人として、竹槍席旗の間を旅行するは、容易ならず。或る旅行者は、シヨスベルエーゴー夫人に告げて曰く、一月にして、ゼウセフ王に送るへき金庫を護衛する一大行列來るへしと。是れ蓋し拿破崙が殆んど沙漠

の中に在るゼーゼフの餓死を救ふか爲めに三月毎に送る一千二百万フランの護衛なり。母は、此の一大行列を待つとに決せり。バイヨンヌに俺留するの間、バイヨンヌは甘快の紀念をユーゴーに捧げたり。五年前に無心にて小女と化粧道具を眺めたるユーゴーは此地に於て始めて戀の如きものに出遇へり。彼れは婉然なる一小女を見て、之を悦へり。彼れ年僅に九歳。彼れは永く小女の事を忘るゝ能はさりき。然れども彼れは死する迄再ひ彼女を見る能はさりき。

已にして護衛の隊列は來れり。第一に騎兵歩兵及大砲二門を有する砲兵あり、次に金庫あり。銃剣を肩にしたる一百の兵之を護り、三百の馬車之に従ふ、ユーゴー等の馬車は、金庫の後、三百車の前に挟まれて進めり。鱷々たる二哩に亘る長蛇の如き二千の護衛は、黄金の護衛といはんよりは、寧ろ佛國文學界未來の帝王たるユーゴーの護衛といふこそ適當なれ。

千八百十一年六月マドワットに着するや、父ユーゴーは已に少將に昇任し、伯爵に叙し、二州の知事となり。當時シエアンマルタンをダークス河畔に追撃して、マドワットに在らさりき。ユーゴー等は、父の居宅マツスラーの宮殿中に投宿せり。宮殿は十七世紀の建築にかゝる、規模宏大、彫刻精美、金碧古香を發す。最も離詩人の眼を喜はせたり。

ユーゴー少將歸るや、長子アベルを薦めて、シヨセフ王の扈從となし、他の二幼兒も亦斯くの如くせんと欲し、ユーゴー及ユーゼンヌを僧侶の管理せる貴族學校に入る。西班牙貴人の子弟多く其中に遊ぶ。佛蘭西は、西班牙の敵なり、西班牙少年は勢、佛蘭西少年を悪まざるを得ず、争鬭は、屢々、多數の西班牙少年とユーゴー兄弟

との間に開かる、兄弟よく戦ひたれども、衆寡敵せずして、兄エーゼンヌ傷を受けるに至る。

ナポレオンの潮は此時正に退き始めぬ。ナポレオンの勢力は千八百十年を以て其絶頂に達し、其領土の廣大なる空前絶後の域に達し。千八百十一年エーゴアのマドリットに着せし時は、已に露帝と兵を搦んとし、一世の霸圖正に傾かんとするの時にてありき、葡萄牙に在る佛國の兵勇は、英將ウエルリントンの爲めに敗ぶれ、腥風正にマドリットを吹く、夫人、乃ち二幼と共にマドリットを去り、再びフナ井ランチヌの花笑ひ、蝶戯るゝ所に歸りぬ。

エーゴ一日花園の中、可憐の少女に邂逅す。年十三四。朱唇皓齒、豊髮綠雲の如し、美目輝て星の如し。其の名をアデルフチーセといふ。フナ井ランチヌの花は、彼等を彼等に紹介せり、清き

愛情は、彼等と結び。彼等は双蝶の花に戯るゝ如く、兩々相携へて、花樹の蔭に憩ひ、謠ふ鳥に聽き、落ちたる木の實を拾ひ。天や、鳥や、星や、夕陽の美に就て語り、少女の學友や衣裳に就て語り、天禁の木實を喰はさる前のアダム、イブの如くして、地における天の樂園に遊びぬ。

文明は、無情なりき。静と美と愛とを藏めたる天の樂園を全く地の手に渡しぬ。千八百十三年巴里の市區改正は、エーゴ一等をセルシユミデー街に追へり、フナ井ランチヌの樂園、今や只濼々たる紅塵のみ。

二

文學界未來の皇帝が、セルシユミデー街に、旭日の如く、上る時に、世俗の皇帝は、夕陽の如く、地平線下に落ちたり。モスコイの

氷雪、巨人の運命を没し、巴里の錦繡、ユツサツク鐵騎の蹂むに任せ、十二年前に詩人の搖籃を照せし孤島半輪の月、今は只英雄の襟懷を寒からしむ。

反動の大勢は、拿破崙の没落と同時に、一步を進めたり、光榮の帝國倒れて、正統の王政回復せり。英國の寄食兒、歸て王冠を戴く、路易十八世是也。

一國の波瀾は一家の波瀾なりき。夫には、憂を與へ、婦には喜を與ゆ。主義異なれば、情亦異ならざるを得ざる乎。拿破崙と與に零落せしユイゴイ將軍は、依然共和の主義を抱持し、濫面苦色、王政を見る、其夫人に至りては、則ち歡呼して、寄食兒を迎へ、悦喜して、ユツサツク兵を待ち、鐵蹄セルシエミズに響くの時、其子ウヰクトルユイゴイが、釭に王朝の徽章百合花を袂めるを見て、滿面

怡色ありき。ユイゴイ千八百二十年十二月の自記に曰く。

吾等の時代に於て、少年の政治思想は、甚だ雜駁也、要するに我等の父は拿破崙也、我等の母は王黨也。我等の父は、只彼等に勳章を與ゆる人として、拿破崙を視、我等の母は、只彼等より愛兒を奪ふの人として、拿破崙を視る。我等の父に於ては、革命は一個議會の精神を作るよりも、大なる事件也、帝國は一個人間の精神を作るよりも大なる事件也、我等の母に於ては、革命は斷頭臺也、帝國は劍也。總官政治の下に生れたる我等は、總て我等の母の膝の上に生長せり、我等の父は軍に在り、而して拿破崙一個の意思の結果として、彼等の夫又兄弟を奪ひ去るとあらば、八歳又は十歳の嫩き學童たる我等の上に柔なる涙の眼を注ぎて、謂らく、我等は千八百二十年には十八歳なる可く、千八百二十五年には我等は佐官なる乎、或は死する乎。之を概するに、王政回復前の騒かしき兩時期を惡むとを母の乳にて教養せられさりし少年は、至て稀也、千八百二年に於て、小兒の妖クロツクミナ怪は

ロベスピエール也。千八百十五年に於て小兒の妖怪は、ナポレオン也。
 近こる余は熱心に父の前に、余がバンテア人的の思想(勤王主義)を述べ
 たりしが、我父は、默然として之を聴き、然る後に側に在りし某將軍を
 顧みて、謂て曰く、時の作るに任せしめよ、兒童としてば、母の思想を
 有し、人としては父の思想を抱く可しき。余は此の諫言に對して、深き
 思に洗みたり。

母の目的は、斯の如くして、殆んど成效せり、去れど共和主義の
 ニーゴイ將軍、ラホリ將軍、自由讀書は一方より之に反對し、結晶
 せんとする兒の頭腦に向て、絶へず、溶解の火を投げたり。
 反動の勝利は、皮想的なりき、反動の上に立てられたる王朝は、
 空中の屋氣樓なりき。拿破崙の手に唾してエルバ島より起るや、歐
 洲爲に震動し、王朝爲に瓦解す、自由主義と平和主義とを旗號とし、
 余は『歸國貴族の亂暴より佛國を救ひ、土地の所存を農夫に保障す

る爲めに來れり』と叫て、復活したる拿破崙は、三民議會以來脈々
 とし絶へざる革命の系圖より分れたる一個の血管として、歡迎せら
 れぬ。ナポレオン帝位に復するに及んで、ニーゴイの母には憂色來
 り、ニーゴイの父には復職來れり。而して少將ニーゴイ其職に復す
 るや、其子ニーゴイを陸軍士官養成所たる『エニルポリテニック』に
 入るゝの目的を以て『コルヂェルエドコツ』中學に遊はしむ。父
 は彼を軍人に作らんと欲せし也。

彼の資性は軍人に適したり。五歳にして執拗、人の御を受けず、
 九歳にして、精悍よく敵國少年と闘ひ、十三年にして豪濶、學生間
 の暴君たり。彼れは、其學友を苦役し、叱咤し、時としては、毆打
 蹴倒せり。彼れは彼れの命を受けて市に走れる學友か、彼の命せし
 乾酪の種類を誤りたりとて、之を毆ち之を蹴りたる事屢なりき。佛

國有名の音楽家にして、兼て批評家たるレオンガティンはいふ、余は此暴君より毆打蹴倒せられたる一人なりと。以て見る可し、膽力豪氣の人を歴し、人を服するものありしを。彼れは又た軍人の資格に必要なる數學に長せり、彼れ數學の才群童に超絶し、屢々教師を苦しめたる事もありき。ユーゴの資性此の如し、軍人たらんと欲せば、亦必ず成効せしならん。然れども彼れの資性は軍人に適するよりも一層多く文人に適せり。

彼れは先天的に文才を享けて生れ、六歳にして、ウヰルヰルを誦し、七歳にしてポルテール、ルイソを讀み、『ドコット』中學に入る日は、彼れの文才已に著く發揚し居れり。而して彼れの敬慕する所自ら軍人に偏せすして、文人に傾けり。彼は軍人の名譽よりも、文學者の光榮を慕へり、彼れはシヤイレマン、アレキサンドル、シ

イザルの勢力よりも、ウヰルヰル、ホームル、ダンテ、セツキスビヤの勢力の長、且つ大なるを認めたり、彼れはナポレオンの落日よりも、シヤイトーブリヤンの明星を慕へり。

千八百十五年六月拿破崙の雄圖、再ひウヲトルローの一戦に壞るるや、ユーゴは小冊子を作り、怒を拿破崙に投して曰く、『戦慄せよ、壓制君主、運命の手は、惡む可き汝の帝國を搖動して、仇を報ゆ』『汝の利己的光榮の計畫は總て破れたり』と。

千八百十六年七月十日ユーゴは其習字本に書して曰く、『余はシヤイトーブリヤンたるへし、然らされは則ち已む』と、彼自ら文人たらんと欲するのみならず、抑天も亦彼を文人に作らんと欲する乎。ユーゴ幼年の生涯何ぞ特に詩歌的なる。波上の船、島國の月、搖籃を安んずる陣太鼓、夢を包める古軍旗、一として、

詩思を動かす材資にあらざるはなし、或は伊太利西班牙に描ける、造化自然の妙畫を眺めて、神來の興に吹かれ、或るは、樹木にかけれる紅の死骸、砲丸に破れたる林下の農舎を見て、戦争の光榮なる外套の下には、悲惨なる下衣あるを思ひ、或はフナランチヌの森のうち、死の影の如く歩む老僧、落葉に耳を聳つる落武者、身は鳥の如く軽く、顔は花の如く清き小女、一としてユイゴの心を動かさざるはなく、雲影落つる所、鳥聲を聞き、晩烟鎖さす所、廢寺を見る。若し夫れ落武者ラホリーの膝の上、羅馬の愛國者、義人、勇士の物語を聞き、遠寺の鐘の如く、此の寂寞を驚かしたるモスコの大敗報を聞き、ナポレオンの再舉を聞き、ウナトルロの大決戦を聞くに至りては、千感、萬情、彼れに迫り、雄心大志、詩囊文藁の中に跳躍す。妙詩絶句、小吻を衝て出る、亦那ぞ怪しむに足ら

んや。

ナポレオンがセントヘレナの岩角に立ちて、愴然たるの年は、是れユイゴが、『ドュット』の學窓に、詩囊を開きて、大なる運命に手を觸れたるの年にてありき。

彼れは十三歳にして詩囊の口を開けり、彼の詩囊は涸れざる泉の如し。彼は先づ短詩を作れり、彼れは更らに彼れを主人公とせる軍事的戯曲を作り、群童と與に之れを演ぜり、彼れは之れに満足せずして更にホルテールを模倣し、路易十八世の回復の事を悲劇に作れり、夜間にはホーラスの歌を譯し、ウヰルマルの断篇を譯せり。彼れは之に満足せず、更に兀々として種々の著作に従へり、悲歌、牧歌、物語、小説、謎、名謎、短詩、短歌、諷詩、滑稽戯曲、筆の動く所、玉鳴り、花開けり。

恐る可きは天才なり、驚くべきは勉強なり、昨者、僅に壳子を脱し、今日、亭々仰ぎ見るべし。彼れの學友二十人は遙かに彼れの眼下に落ちたり、彼れの師ドコットは彼れと競ふ能はざるを見て、遂に作詩を廢せり、學校内の秀才たる兄ユーゼンヌ又た彼れの後に瞠若たらざるを得ざりき。彼れ此時を以て、悲劇を作り、半ば成りて、眼更に高く、才更に聳へ、舊稿見るに足らずとして之を棄てたりといふの一話は彼れの進歩の駿速を見る可し。

彼れは斯の如く進歩せりと雖、彼れの思想は依然として反動の兒なりき。彼れは母と與に快よくナポレオンの没落を眺め、路易十八世の回復を歓迎し、詩に文に『ブルボン』朝を謳歌したり。

三

千八百十七年佛國學士會は、『各種の産業の上に及ぼす學業の幸福』

といへる題を以て、詩を天下に募れり。佛國學士會は、千六百三十五年佛國大宰相中の最も偉大なるリセリユー(路易十三世の宰相)の創立する所、革命の際一時其名稱を失ふたるの外、百八十餘年の間綿々として傳ふ、實に佛國文學界の中央政府と謂ふ可し、故に募に應ずるもの亦多く當世知名の文學者也、ユーゴ一時に十五歳、身は中學の一書生を以て、大膽にも募に應じ滿天下の文學者と才を角せしたり。然るに審判官は、其詩の餘りに神逸なるが故に、十五歳の小童たるユーゴの作なるを信する能はずして特に第九位に落したり。ユーゴの母は、其子を携へ、學士學院の書記レイナルドに迫り、年齢の謬なきを證明したれども、彼れは只『十五歳の見にして出來可き作なりと思はれず』と答へたるのみ。レイナルドは拿破崙第一世の御用詩人也、老驥を謳歌するに慣れたる彼れは雛鳳を識る

能はさりしなり。去れど他の學士會員中には彼れより慧眼なるものありき。ホルテールが『余の繼續者なり』と呼ひたるフランソアドヌッフシャトーとデリエーの衣鉢を相續したるカンパノンとは、與に、口を極めてユーゴーの詩才を賞揚したりき。特に學士會員の泰斗、佛國文學界の霸王、シャイトイブリヤンは、ユーゴーに與ゆるに、『最秀見』の好稱を以てせり。

シャイトイブリヤンは一年前ユーゴーの習字書に描かれたる偶像也、一年前に於ては、只神壇の輿に拜まれたる偶像、今やユーゴーの才を賛して曰く彼れは最秀見なりと。最秀見の一語、万金より重し。當時シャイトウブリインの口より此二語を得るは、『黄金の雞冠花』百個を得るよりもユーゴーに於て尊かりしなる可し。

此時に始まりたる兩者の交は四五年の間頗る暖かなりき。去れど

大なる過去を有したる一方か、大なる未來を有する一方に向て、與へたる感化の痕跡として尋ね可きものは實に寥々たり。

シャイトイブリヤンの保守的思想は、母の保守的感化に一筆を加へたるへしと雖、墨上の黒抹、何ぞ痕跡を見るを得ん。文學上に於ては、彼れは、『ロマンチック』派の泰斗、新文牀の創作者也。而して其年齒亦四十を踰へて五十に近かし。名譽に於ても年齒に於ても、人を動かすに足る可き也。然るに十四五歳より二十歳前後に至るの間、彼れと交遊せしユーゴーの文牀、毫も變化の跡なし、千八百七年に『クラシック』派たりしユーゴーは、千八百二十二年に於ても依然として『クラシック』派也。千八百十七年の懸賞詩より、千八百二十二年の『詩集』に至る迄五年間ユーゴーの著作を貫くものは、『クラシック』派也。ロマンチック派の系統に於てシャイト

ウヅリアンの繼嗣たるユーゴーか此五年間の交遊に動かさるゝ所なきは奇怪なるが如し。奇怪なるか如しと雖、鐵の鉛よりも、鎔かし易からざるを思は、決して奇怪にあらざる也。大なる變動は至静の中に起り、眞個の變化は沈思の後に成る。シヤトリーヤンの感化は、鐵に與へたる熱也。その未だ溶解するとなきを見て、鐵中一の熱なしと斷ずるは、淺見たるを免れず。

ユーゴーの頭腦に凝着せし古文跡が、千八百二十六年より全く溶解するに至りたるものは、固よりユーゴー自身より發したる光熱の然らしむる所なりと雖も、之を後にしてノーヂエ、之を中にしてリマルチン、之を先にして、シヤトリーヤンの三明星より發射せし温光、亦與りて力なしとせん哉。

彼れ『ドコット』中學に在る僅に三年。彼れが一生の準備、半ば

此の三年間に成る。彼れの小説として、今日に傳ゆ可きものを始めて作りたるは此時にして、我森田思軒居士が、譯せられたる『バグヂヤルガル』は彼れが學友に向て、二週間を以て小説を作るの約を覆みて出てたる者、森田氏の譯したる原本は、千八百二十五年に至りて改竄せるものに係ると雖も、亦以て十五歳の小兒が如何なる文藻を有したるかを見る可き也。彼れの學業は已に著く進歩し、父が豫定したる『エニールポリテクニク』に入校するには餘ある學識を具へたりと雖も、年少詩人としての名譽は已に彼れを見舞へり、光榮の美味は、已に彼れの吻頭に接せり、文學界大皇帝の金冠は、已に彼れの前程に落下して、人の拾ふに任せり、彼れ豈に之を以て、一個將軍の名譽と換へん哉。彼れ後年其兒シヤイレスユーゴーに謂て曰く、筆の人は、劍の人に勝ると。彼れ此時の信仰亦此の如きの

み。
母は、彼の知己なりき。母は兒の成効を信し、兒の光榮を信して、兒の目的を是認せり。父は母よりも不明なりき。父は拿破崙を始めとして當時の武人の如く、文學の價值を知らざりき、文學の光榮を認めざりき、文學と懶惰とは同一義なりと思ひ、文學者と心學者とは同一物なりと思ひたりき。故に父はユーゴーを『エュールボリテクニツク』に入るとは、其兒を文學の墮落より、軍人の天國に救ふの道なりと信したりき。ユーゴーが再三『エュールボリテクニツク』の門を踏むを否みたるに及んで、父は無情にも學資の供給を絶てり。學資の命脈と與に、學校生活の命脈は終れり、千八百十八年八月、彼れは兄ユーゼンヌと與に『ドコット』學校を去りて、母の膝下に來りぬ。

學校の籠樊を超越する程に生長せし彼れ、一たび學校外に出るや、昂々として奮飛せり、千八百十九年五月、ツィルーズの競詩會に送りたる詩三篇の中、一篇は『黄金の百合花』を獲、他の一篇は『黄金の雞冠花』を獲たり。前者は革命の際倒されたるヘンリー四世の像を王政復古の時、國民歡呼の中に再建したるを題目とし、後者は『ウエルダンの乙女』と題し、ウエルダン村の姉妹三人が、追放貴族に金錢を贈りたるの故を以て、革命裁判によりて死刑を宣告せられたる物語を描ける者也。

彼れが同年の自記中、左の言あり。

斯の世紀と與に生れたる新時代の中には、大詩人將に現はれんとしつゝある也。
猶ほ數年を待てよ。

彼れ自らの抱負斯くの如し、彼れの自信斯くの如し、然れども世は、大詩人の離兒を遇する所以の禮を知らず、世は彼れに與ゆるに幸福を以てせずして、患難を以てす。彼れ如何にして自立す可き乎。父は、已に學資を絶てり。母は主義感情の相異なるが爲めに、殆んど今や父と相離れたり。エーゴーは如何にして、母を養ふ可き乎。財産なく、収入なく、殆んど赤條々にして、風波荒き人世に投げ出されたる十七歳の小兒は、如何にして、風を凌ぎ、如何にして、波を踰ゆ可き乎。一枝の筆は、一艘の大鋼鐵艦よりも、頼母しき乎。然り、彼れは一生の運命を一枝の筆に托して、茫々たる大洋に乗り出たせり。

四

彼れは文を以て世に立つ第一着として、兄エーモンヌと與に、雜

誌『保守文學』を發刊せり、千八百十九年十二月を以て第一號を發刊し、毎月二回の發行と定めたり。是れより先き彼れが學校を去るや彼れは、母と與に貧しき生活を爲せり、彼れは生活の困難の爲めに幾度か母と與に其居を轉したり、彼れは又たその母の病めるによりて、更に人生の辛酸を嘗めたり。彼れの母の病床か賃借せる三階の一小室に安んせられ、其窓は、殆ど隣屋の壁に相接し、開濶の眺望に乏く、又新鮮の空氣に乏く、その病の快癒遅々たるを見て、病める其母を負ふて、一の小園を有する他の家に轉じたるの時、彼れの胸中果して如何なりし乎。彼れが『保守文學』を發行するに至るや實に此の如き事情に迫られたるが爲めのみ。シャートリーマンの機關『保守』曰く『保守文學』は、教養の恩を慈母に謝する孝順の目的を以て起されたりと『保守文學』は彼れが、蘊蓄せる才識を發揮す

可き機會を作れり。アベル、ユーゲンヌの二兄と彼れとは専任記者なれども毎號少くとも三分の一は彼れの筆なりき。『保守文學』は千八百二十一年三月に至りて休刊せしが、其間に發行せる三卷中少くとも二卷はユーゴの起草せし所なりき。

彼の著作として、『保守文學』に著はれたるもの、中最も賞玩す可きは、詩なり、固より古文體なりと雖、純清妍和、愛す可し。散文は、バイロン、モール、カシミルドラウ井ヌ、アンセロ、ウチートルスコット、シャックデリユー、ガスバルド、ボン、シャイトウブリヤン等の文學を評論したるものにして、彼れの學殖と批評の才とを見る可き也。彼れは又た此の文學雜誌の中に政治論を掲けたり、その政治主義は依然として、勤王主義なりき。勤王主義と古文體とを除くの外彼れの未來は茫茫の中已に微光を漏らしたりき、一年前

學校にて作りたる『バクシャルガル』は『保守文學』に現はれて、小説家として彼の未來の恐る可きを語り、メルウ井ユ、リニバンカ、ルムーシユ等の戯作を解剖細論したる驚くべき才氣は、彼れか戯曲家として大なる未來を有するを語れり、而して『保守文學』は又た彼れが批評家としても有望なることを語れり。彼れの批評中最價値あり最も著名なるはラマルチンの『プレミエル、メヂタシオン、ポエチック』の批評なり。ラマルチンはユーゴより長する十二才、詩界のシャイトウブリヤンと稱せらる。此の兩文學者か交を結ひたるは、此の批評を公にせし少時（千八百二十年）後なりき、此の批評は彼等交際の緒となりしなり。ラマルチン後年面會當時の事を記して曰く。

幼年は友を作るの時也、余がユーゴを愛するは余か心猶ほ發達しつゝ

ありし幼時に彼れを知り、彼れを愛したるが故也。余は昨日かの如くに記臆す、其後君牧師たり、當時銃卒たりしロアンの大公爵一日余がカイドールセイの寓に來りて曰く余と與に彼れを最秀兒と名く、汝は他日汝が者を看よ、シヤートツブリヤン已に彼れを最秀兒と名く、汝は他日汝が機實の中に慳を見るが如く自ら喜ぶ事あるべしと、公爵に從て行くや、直に與のうす暗き家の地板に抵りぬ。嚴格にして沈鬱なる母は、年齢相異なる兒等即ち其子供の教訓を力めつゝありき。母は余等を少しく離れたる低き室に導けり、其隅に讀みてある乎、書きつゝある乎美にいで且大なる頭を有する賢くして思慮ある少年在り、是れ即ちユイゴイなりし也其人の筆は、今や全世界を驚し且つ恐れいむ。

ラマルチンは『ロイマンチック』派の勇將也。彼の『メヂターシヨシ』は、『ロイマンチック』派運動の一紀元たり。曩には『ロイマンチック』派の先輩たるシヤートツブリヤンを友として、今亦『ロイマンチック』派の勇將を友とす。彼れが胸中の氷雪は、愈春に近けりと謂ふ可し。

三寸の筆は、五尺の男子を救ふに足らざりき、生活の困難は、彼れに來れり。『保守文學』の収入は至て微小なりき。更に小冊子を發行したれども、是れ亦甚だ賣れざりき、一年の歳入僅に七百フラン（目下の相場にて我金貨百三十八圓餘）。是れ彼れが豪奢を競へる巴里に於ける一年の生活費なりき。彼れ『悲惨』にマリオスなる一少年の貧生活を描て曰く。

マリオスの生活中には、彼れが自ら階段を洒掃したる事あり、半錢を以て果實商より乾酪を買ひし事あり、夜を待て麵包屋に往き、麵包の小片を買ひ、之を盗みたるかの如く、竊に之を彼れの室に持ち歸りたる事ありき。時を以ては、偏隅に在る居人の店頭、腕の下に書を挟み、跼蹐の風を爲せる武骨なる一少年あり、彼を衝き出んとする饒舌なる雇人の間に入り、流汗滴々たる前額より帽を脱し、且つ又た身を屈して、驚ける居人の妻に敬禮し、一番頭に敬禮し、三四錢を拂つて、羊肉の一小片を請ひ、紙を以て、肉を包み、腕の下なる二冊の書籍の間に之を挟みて去る

六十一
を見るもあき、此れマリオスなりき、彼れは自ら此片肉を調理し、之を以て三日を暮せり。

是れ千八百十八年の末より、千八百二十年の終に至るエーゴの状態にてありき。

此時機はエーゴ飛躍の時期なりき、飛躍は歩行よりも、苦しきを得ず、故に此時機は、エーゴ一生の中最も、辛酸の時機なりき、最も繁忙の時期なりき、最も勤勉の時機なりき、而して又た最も進歩の時期なりき、是れ正に彼れが少年より成人に飛躍し、書生（生）の紳士に飛躍し、木葉文學者より、大文豪に飛躍する過渡の時機（機）にありき。

幾多の鐵鞭は、駿足の上に閃けり。名譽心は、彼れを撻てり、貧苦は彼れを撻てり、孝順の心は、彼れを撻てり、是等の鞭撻は、余

の語らざるも、讀者の夙に解する所なるべし、此時是等の外、彼れに向て少なからざる獎勵の撻を加へたるものあり、何そや。

フナ井ランチンヌの花園の中に契られたる花束の如き約束は已に七年の春を経たり。エーゴの母は幸に、小女の兩親フナーセー夫婦と交遊あるの故を以て、彼れは母と與に屢小女の家を訪ひ、七年以來の戀人と七年の間無言の情を交ゆるを得たり。彼れが不幸の中に幸福を感じ、貧苦の中に貧苦を忘れ、患難に處して、心氣常に暢然たるを得たるは、此の一鞭の力多きに居らすんはあらず。彼等の戀は、忍ひたれども色に出でたり。兩家は往來を停止して彼等を遮断せり。エーゴ一生の中最も悲み、最も苦しむたるは、此の時に在り。去れと彼れの戀は、名譽心に對して、權衡を失はさりき、彼れは、名譽を以て、一の目的とすると同時に戀を達する一の手段な

りとなせり。水は巖石に觸るゝ毎に跳る。愛の障礙彼れに接する毎に、彼れの心は奮へり、跳れり、強くなれり。而して彼れの筆は益々走れり、彼れの才力は益々進めり。一言にして之を盡くせば彼れの戀は、墮落にあらずして、進歩なりき。彼れ大なる愛を一方に獲んとしつゝある時に大なる愛は他方に彼れを棄てたり。

拿破崙第一世がセントヘレナ島に於て醒めざるの眠に入りたるの翌月、千八百二十一年の六月、エーゴの母はエーゴを棄てて天に上ほれり、彼女は母よりも大なりき、母にして又た父。彼女は女よりも大なりき、女にして又た男。彼女は男子の如く獨立に、男子の如く嚴格なりき。彼女が兒を教ゆる時には、父の如くなりき、去

れど兒を愛する時には母なりき。彼女の肖像は、慥かにエーゴの思想中に映寫せり、彼れの世に在る間はエーゴは母の如く、勤王黨にして又た母の如く反動黨たりき。母の死せる後殆んど十年間、彼れは母の鐵型中より躍り出る能はざりき、若し夫れ乳と與に母より享受したる眞率、純潔、眞正、嚴格、高尚の諸徳に至りては、エーゴがパンテオン寺に石を枕とする迄エーゴの心より拂拭する能はざる所なりき。

モツキスピヤの母は『マクベス』『ハムレット』を見るに及ばずして死し、エーゴの母は『悲惨』『ノートルダムドパリ』を見ずして死せり。去れどエーゴの母は其子の新聞記者として敏腕達筆を見、年少詩人として其才氣煥發を見、更に大なる信任を其未來に置きて眠れり。其子の頭に戴ける光榮の冠が彼女の尊崇せし路易十八世の

冠よりも尊くなりしを見ずして死せし死は、惜しむ可しと雖、其子の未來に安心して、眠りし眠は亦幸福の眠にあらず耶。

父は來らず、世は知らず、ユーゴは獨りにて葬り、獨りにて悲しまざるを得ず、貧棺、孤兒に送られ、黒土最愛を隠くす、彼れ新墓の側に徘徊し、依々として去る能はざるもの之を久ふせり。

ユーゴは已に天地の最愛を喪へり、如何にして之を慰む可き乎。愛の重傷は愛の囁嚀を以て療するを要す、彼れは即ち世界の最愛に走れり。母の死して後數週にして、結婚の約は、彼等の間に成れり。又な數週にしてフアト夫妻の許諾は來れり。去れど之と與に苦しき疑問は來れり。如何にして、結婚の資を作る可き乎、如何にして、一家を立つ可き乎。『保守文學』は失敗の末路を以て母の死せる三月前に廢刊せり、彼れは何れよりして資を作らん乎。彼れは先づ

兄の助言に従ひ、彼れの作詩を編輯し、千八百二十二年六月、『オールドエペラツド』の第一巻を出版せり。彼れは二年前ラマルチンが『メヂイターション』に於けるが如く成効せんとを熱望せり、其用紙は粗悪なりき、其印刷は拙悪なりき、去れど反動の天下は反動の文學を歓迎したりき。彼れが第一の詩集は順風に乘じて出でたり、彼れは未だ一の敵を有せず、又た一の嫉妬を有せず、彼れはその文牒の古文派なるが故に、最も古文派より歓迎せられたると同時に『ロマンチック』派の泰斗シヤートーブリヤンより最秀見と稱賛せられ、『ロマンチック』派の勇將ラマルチンと交ある彼れの著作は『ロマンチック』派よりも攻撃せられずして寧ろ優遇せられ殆んど八方賞賛の中に大勝利を得たり。是に於て『メヂイターション』の如く成効せんとを期した

る『オードエバラッド』は『メヂターション』よりも成効せり、ラマルチンを先輩とせしユーゴの位地は、ラマルチンに接し來れり。拿破崙朝はその頽廢と共に其人物を率て去れり、その後に来れる『ブルボン』朝は、勢、新人物に渴せざるを得ざりき。故に當時の文學者中少く名ある者は、總て王朝の引力に吸收せられたり、シヤート・ブリヤンは伯林又は倫敦駐在の公使となれり、ラマルチンは『ロマンチック』の運動を放擲して公使館の書記官となれり、ユーゴに於いては仕官を求めしめば、彼れが曾てフナ井ランチヌの木の実を拾ひたるよりも容易なりき、去れど文學に忠實なる彼れ、世俗の名譽よりも文學の光榮に熱心なる彼れは、一枚の上衣と三枚のシヤツより外に財産なきにも拘らず、遂に王朝の屬吏たるを求めざりき。去れど幸運は求めずして來れり。彼れの詩集第一版は七百フラン

を彼の手に渡し、路易十八世は一年一千フランの年金を彼れに與ゆるに至れり。文學者に王の私財中より年金を與ゆるの事たる、古來佛國王朝の慣制にして、著名の文學者は總て此の特典に與る、獨りユーゴにのみ與へたる特惠にあらず、去れど今ま之れをユーゴに向て與ゆるに至りたるは、ユーゴの如き多望の文學者を籠蓋して王朝を謳歌せしめんとするに出でたるどころもあらん、ユーゴが勤王主義に忠實なるを賞するに出でたる所もあらん、去れど亦別に一の近因の路易の心を動かしたるものあるによらずんばならず。千八百二十二年に起りたる隱謀に加擔したる連判の中にドロソと名くる少年あり、ユーゴは竹馬の友也、ドロソの父は曾てユーゴ將軍の下に仕へたる一將校たり、ラホリー將軍の獄は其告發する所也。之よりドロソ家とユーゴ家とは交を絶てりと雖、多情なるユーゴ

川は、其舊友の危険を傍観する能はず。此の少年を隠匿せんと欲し、少年の母に向て一書を裁し、彼れドラゴン街に住居するも、メジエル街に一室を賃有するとを告げ且曰く『汝の子をしてそこに身を隠さしめよ、余は甚だブルボン家に忠なるを以て決して何人も之を悟らじ』と。彼れは此書を郵便に托したり、其書は、郵便局より内閣に移り、遂に路易王に捧げられたり、王微笑して曰く『少年は大なる才能を有すると同時に善良の心を有す、彼れは正直者なり、年金者の缺あらば、彼れに年金を與ゆべし』と書は再び封せられて、母の許に配達せられぬ。ドロロンにして之に従ひしならば、ユーゴーも亦拘引せられて處刑せられたる可し、ユーゴーは郵便を出してより毎夕メジエル街頭蔭暗き所に立ちて其友の來るを待ちたれども、其友は此に來らずして海外に去れり。是れ路易王が年金を與ゆるに至

りたる一源因にして、即ち、一方より之を見れば義侠の報酬なり、他方より之を見れば血肉の代價なり。

七百フランの資本、一千フランの歳入は、愛の約束を完ふするの機會を作りぬ千八百二十二年セントシユルピス寺に於て結婚せり。此寺たる、ユーゴーに於て、終生不思議の聯想を起さしむ。彼れが結婚式を行ふたる禮拜堂は十八ヶ月前母の喪儀を營みし所也。彼れが披露の宴を開きたる一室は、ラホリー將軍が、十一年前死刑の宣告を受けたる所也。更らに奇とす可きは、兄ユーゼンヌか、此の宴席に於て突然發狂せし事之れ也。一の愛を獲ると同時に、他の愛を喪ひ、妻を獲ると同時に兄を喪ふ、其感果して如何なりし乎。首を回らして、二十年前に歸れ、ベサンソンに呱呱の聲を擧げたる幼兒は、今や斯の如く生長せり。彼れは『オードエバラッド』に

七十
於て、名を獲、フナヒセ嬢に於て、愛を獲、詩集の收入王の年金
に於て、家を獲、彼れ今は見事に一個の男兒となれり。一個の紳士
となれり。一個の文學者となれり。一個の人間となれり。

一般文學に於けるユーゴー

一

ユーゴーにして今ま讀者の前に描かれたるユーゴーに止まらしめば、彼れは只一個凡近の人物のみ、彼れは只古文をよくする一個の文學者のみ、彼れは只順従なる勤王家のみ、大なるもの、高きもの、貴ときもの、強きものは彼れの中に存せざる也。彼れは只時勢の謳歌者のみ。彼れは時勢の作爲者にあらざる也、彼れは時勢の従僕也、時勢の主人にあらざる也。
然れども彼れは生長したる上に生長せり、進歩したる上に進歩せり、彼れが三十歳の肖像は、二十歳の肖像よりも、美也、六十歳の肖像は三十歳の肖像よりも美也、彼れが生涯は、斜面的也。次第に

高天に向て近けり、彼れが生涯は、擴充的也、次第に宇宙に向て廣
がれり。

七十二

千八百廿年より千八百廿六年に至る彼の生涯は至りて低小なりき。
彼れが、『バクシヤルガル』と伯仲の間に在る『ハンヂーランド』
を著はして小説家の名を博したると、路易王より年金を二千フラン
に増され、稍豊かなる生活を爲すの紳士となり、更に愛兒を弄する
の父となりたると、千八百二十五年路易王の繼嗣たるシヤレース十
世よりラマルチンと與に十字勳章を授りたると、シヤレース王の即
位の禮に赴きて、王が僧侶の足下に屈伏するを見て驚歎したるとの
外、彼れの言行に於て、特に記す可きものなく、二十三歳なる彼れ
の肖像は二十歳なる彼れの肖像と殆んど異なる所あらざるなり、去
れど此間彼れが見る可らざる所に於て、矢の如く進歩し、つ、つ、ありし

は亦疑ふ可らず。彼れは此間ウテトルスコットを愛讀せり、彼れが
『ハンヂーランド』の或る部分にはウテトルスコットの文體に擬似し
たる所すら見出すなり。彼れは千八百二十三年六月を以てウテトル
スコット論を作れり、千八百二十四年六月英國の大詩人ロイドバイ
ロンの死するや、彼れはバイロン論を作れり、ユーゴーが此間バイ
ロンスコット等英國文學者より『ローマンチック』の新文體を感染
したる可きは論を待たず、又たユーゴーが此時シヤイレズノイチエ
と交るの機會を得たるは、シヤイトーブリヤン、ラマルチンと交を
結びたると同く亦是れ彼れを『ローマンチック』の大渦中に捲き込
まんとする波濤也。蓋しノイチエとの交は『ハンヂーランド』の紹
介なりき。ユーゴー『ハンヂーランド』を著はし、天下稍嫉妬の眼
を以て、之を酷評するに當てや。彼れより二十二歳の兄にして、當

七十三

時佛國著名の小説家として、『ロマンチック』派の牛耳を握れるシャ
 ーレスノーヂエは、最も鄭重に之を評論し、才力、博學、文章の強
 勁、着想の豪大、風刺の精美を賞賛し、之れが爲めに、ユーゴーを
 して、一層文學界に重きを爲さしめたり。ユーゴーは直にノーヂエ
 を訪ふて、知己の恩を感謝し、兩者の交始めて成れり、是れより其
 交日に深くシャールス王即位の禮式にもユーゴーは彼れと相携へて、
 之に赴き、又た彼れ及ラマルチンと相與にアルプス山に遊び、其合
 作の記行を公にせんとせり。

是等の交遊は、無意味の中に、最大の意味を有したりき。静穩の
 中に活動を有したりき、平凡の中に進歩を有したりき。静穩の
 八九年前より交遊、讀書、熟慮によりて、静かに而も確かに、而
 も眞に一步は一步より進み來り、一日は一日より熟し來り、栗の實

の一朝の日に照らされて、外皮を脱するか如く逸出せる者、是れ即
 ち千八百二十七年出版の『クロソウエル』也。

千八百二十七年は、ユーゴーに於て生涯の一大段落也、彼れは此
 年を以て平凡より俊英に移れり、舊文學より新文學に移れり、個人
 より公人に進めり、巨人の如く彼れの生涯が群俗の上に超越し、大
 躍歩毎に大地を動かし、世界に痕跡を存するに至りたるは實に此年
 に出版したる『クロソウエル』に始まる。余は是れより筆を改めて、
 ユーゴーの新生涯に移らざる可らず。

二

若しユーゴーに向て金鷄勳章を與ゆ可くんば、『ロマンチック』
 派の大將軍として、『クラシック』派を滅絶したるの功勳に在り。
 故にユーゴーの文勳を記するには、先づ『ロマンチック』の運

動を記せざる可らず、『ロマンチック』の運動を記するには先づ、『クラシック』の何者たるを記せざる可らず。

『クラシック』の特質三、第一繩墨的、第二抽象的、第三鄭重。『クラシック』は、文學上の專治帝政なり。專治帝政に於いて、瑣細の事も規律、慣例を尊ぶが如く、『クラシック』に於ては、思想は勿論言語、文法の末にも規則に拘泥す。專治帝政に於て、抽象的を尊ひ國民を一人の中に顯示せしめ、余は國家なりと言はしむるか如く、『クラシック』に於ては、眼中殆んど個人なく、總て抽象的に描寫す。專治帝政に於て、禮儀を重んじ、辭令を尊ぶが如く、『クラシック』に於ては、用語音調最も鄭重ならんとを要す。概括して之を言へば、貴族的、人爲的、巧辨的なるものは、『クラシック』也。『クラシック』の弊は、第一、事物、個人に就き直接の觀察を曠缺

する事、第二、自然の直覺全く消滅する事、第三、批評の精神衰弱する事、第四、歴史の感覺消失する事、第五、人民てふ觀念を失し、全く朝廷の文學たる事。

之れを要するに『クラシック』は死せる文學なり。眠れる文學なり。試に察せよ『クラシック』派の諸大家か産みたる著作は積て丘の如く山の如し、去れと唯一のラフナテンを除き其他に於て人民の思想に反響を與ゆるもの果して幾何かある。アリオスト、タッスの歌は伊太利の如何なる賤民も之を誦し得へし、シルレル、ゲーテの詩は日耳曼の最も卑賤なる平民の唇頭にも誦せらるべし。然れども佛國の農民又は勞役者の間に、ラシンの文を解するもの果して幾人かある。

『クラシック』派中、俊才多能の士なきにあらず、然れども彼等は不

幸にして、文學が權力の奴隷たる時代に生れたり、十七世紀佛國二
大悲劇家の一なるラシオンと『クラシック』に哲理を興へたるボア
ロイとは與に路易十四世の史筆として王朝の盛を頌したり。

十七世紀の二大喜劇家の一たるモリエルはコンチー公に保護せられ
『コンチー公の喜劇』の看板を掲げて滑稽演戲を興行し、更に路易十
四の保護を受け、『王の組』なる特別の名稱を賜ふて僅に其戯曲を世
に行ひたり。コルテイユは、ラシオンよりも、王朝の仁恵を受けた
ると少なしと雖、猶ほ路易十四世の權力より自由なる能はざりき。
十七世紀小説の代表者ラ、フアンテインは落磊豪放の快男子也。去
れど彼れは、路易十四世の大藏大臣フーケーの保護の下に生活し、
フーケー、君寵を失するに及んで彼れは自活の道を失ふて、殆んど飢
へたり、幸に彼れを愛するブイヨン公爵夫人の保護によりて活くる

を得たりき。

ウヰルマン曰く佛國文學は三個の勢力より成る、曰く宗教、曰く
古昔、曰く、路易十四世の帝國なりと、然り十七世紀の文學即ち『ク
ラシック』は實に古昔と路易十四世の帝國の結婚より孕れたる者也。

路易十四世の死と與に、宗教上の偽善は死せり、政治上の偽善は
死せり。然とも文學上の偽善は死せざりき。ルソー、ボルテール
等十八世紀の政治的文學は多少十七世紀の偽善的古文に一撃を加へ
たるに相違なしと雖、彼等の勢力は文學よりも、社會政治に用られ、
文牒よりも精神に用ゐられたるを以て路易十四世時代の古文は、依
然として拿破崙第一世の時代を支配したりき。特に拿破崙の武徳を
頌したる『クラシック』派は拿破崙の光を受けて、更に輝きたりき。
『クラシック』派の意義此の如し。『クラシック』派の狀態此の如し、

其敵たる『ロマンチック』は如何。

『ロマンチック』の意義たる英に於ても、獨に於ても、佛國に於ける如く明白の定義を有する要なかりしを以て、佛國に於ける如く明白の定義を有せざる也。『ロマンチック』は今日我邦の讀書社會に誤解せらるゝ如く、奇を傳へ、空を語るものにあらざる也。若し適當の定義を下せば、『ロマンチック』は『自然及自由を基礎とする反動文學』なり。若し強て譯語を附せば『自由派』となすを近しどなす。『ロマンチック』の特色は、第一、自由主義、第二、非古文の精神、第三、近世的趣味、第四、自然を愛する事、第五、個人主義、第六、國民的精神、第七、『ユニマニテ』之を約言すれば、人為を排して、自然を尊ひ、空想を離れて、實在に近き、繩墨を捨て、自由に赴き、朝廷を去て、人民に就き、專制を退て、人情を迎

へ、模倣を退けて、個人に進むる者、是れ『ロマンチック』の大意義なり。

『ロマンチック』の起點を尋れば遠く十六世紀の英國に遡る可し。而して英國より佛國に傳はり、更に路を獨逸に轉し、獨逸より更に佛國に復歸し英國より新に入り來る者と相合して、佛國文學上の革命を作れり。『バイブル』は文學古代の起點にして、セツキスピアは近世文學の起點なり、即ち『ロマンチック』の起點なり。セツキスピアはホルテールを動かせり、ルソーを動かせり、ゲーテを動かせり、ユーゴーを動かせり。彼れの勢力は、無限の勢力也。彼の文學は、千古に通ずるの文學也。彼れに次て、『ロマンチック』の祖師とす可きは、英國近世的小説の開山たるリチャルドソンなり。歐洲『ロマンチック』運動の父と稱せらるゝルソーはセツキス

ピヤトリチャルドソンとを學びたる者也。ルイソンの感化は、佛國に傳はりたるより多く獨逸に傳はれり。ルイソンの『エミール』『ヌーヴェルエロアーズ』は獨逸に渡り、ゲーテ、レツシング、シルレルを動かして、獨逸に於ける『ロマンチック』となれり。特にゲーテが『ヴェルテル』を作るに於て、ルイソンの感化は實に尠少にあらず。而して、獨逸に於ける『ロマンチック』はスタール夫人及シャイトウブリヤンに由りて、再び佛國に歸り來たれり。

又た一方を見れば、十八世紀の前半に蟠りたる『クラシック』の大詩人ポープ死してより、ポープ派の冷血詩人勢を失ふて、『ロマンチック』派の新詩人英國に生れたり。その最も勢力を佛國に及ぼしたるは、エドワルドヨンクマックヘルソン及びバイロンの三者にして、就中マックヘルソンの『オーシアン』は獨逸に於てエルデル、

ゲーテを動かしたるが如く佛國に於てスタール夫人及びシャイトウブリヤンを動かして、『ロマンチック』の運動を鼓舞したりき。

斯くの如くして、獨逸より來れるもの、英國より來れるものは、『ロマンチック』なる文學上の一派を作れり。ルイソンは固より佛國に於て最早古文の羈籠を逸脱して一個の新文體を發見したる者なれども、『ロマンチック』なる一派の建立者にあらず。彼れの使命は、政治上、社會上の革命を作るにありて、文學上の革命は彼れが固有の天職にあらず。然らば、天は文學の革命を成すの天職を何人に托したる乎。

三

第一の天職を享けたる者はスタール夫人也。

スタール夫人は實に佛國革命時代の宰相中最も理財の才あり、佛王の宰相中、最も人民に親愛せられたるチツケルの女也。

彼女の天才は日耳曼旅行に由て大なる者となれり、彼女は、佛人にして最も日耳曼を知る者なりき。彼女はグーテ、シルレル及その他日耳曼のロマンチック派の首領と相交れり。彼女の旅行は、佛國が曩に與へたるものを取るの結果となりぬ。

彼女は又た英國に遊ひて、『ロマンチック』の空氣に觸れたり、バイロンの如きは、屢々彼女を其の居クレーベツトに訪ひたりき。

スタール夫人は佛國第一の男たるナポレオン第一世と同一の舞臺に舞ひたる佛國第一の女なりき。千八百二年より千八百十四年に至る歴史を或る觀察點より見れば佛國文學界の最大なる女と佛國政治界の最大なる男とが決闘せる紀錄なり。三十六歳の壯婦なる彼女が、

統領ナポレオンに反對せしが爲めに、パリより五十里外に放逐せられたるは、恰もユイゴイを生みたる千八百二年にてありき。

千八百六年放逐の令を破りて、パリ近傍に住したる彼女は、警官の爲めに更に逐はれたり。千八百十年『日耳曼』をパリに出版せん

とせしが、皇帝ナポレオン第一世は、彼女を佛國外に放逐し、彼女と親交ありて彼女と往來せし來客をも放逐せり。佛國古今の文學者

中、ナポレオン第一世が、最も愛したるは、コルネイユにして、最も惡みたるは、スタール夫人なりき。拿破崙ユルテイユを歎賞して曰

く彼れ若し生存してあれば、余は彼れを公侯に封すべしと。拿破崙の愛憎斯の如くなるが故に拿破崙の時代に在りては、『クラシック』は、政府黨の文學にして、『ロマンチック』派は反對黨の文學なりき。スタール夫人が、拿破崙と戦ふたるは、拿破崙を通じて、ユル

チイユラシシと戦ふたるなり。スタール夫人が、政治上の帝政と戦ふたるは政治上の帝政を通ふして、文學上の帝政と戦ふたる也。之を要するにスタール夫人は、『ローマンチック』に向て哲理を興へたる者也。彼れの著『社會の組織及其生産せる文學』は批評文學の局面を一新し且つ文學の眞面目を開示せる者也。スタール夫人曰く文學は社會状態の産物なりと、是れ此書の大眼目にして、又た文學界の專治帝政を破壊する一大鐵槌なりき。

彼女の第一の傑作『日耳曼』は、佛國に先んじて、『ローマンチック』の光燦然たる日耳曼の新世界を佛國人の眼に映せしめたるものにて、其友ゲーテが此書を評していへる如く『兩國民の間に偏見を興て立てられぬ所、其の長短を正確にたる一大重砲』なりき。而して彼女はユイゴが、『クロンウエル』の序文を公にしたる十年前、

千八百十七年にその天職を完ふして永き眠に入れり。

スタール夫人の立てたる礎に家を建つるは、シヤイトリブリヤンの使命なりき。スタール夫人は、『ローマンチック』の哲理を代表し、シヤイトリブリヤンは、『ローマンチック』の言語、色彩、想像を代表したり。

シヤイトリブリヤンはスタール夫人の如く、旅行によりて英獨文學の感化を受けたりき。シヤイトリブリヤンが、英國に數年の流浪的生活を試みしは、『オーシアン』の著者將に死せんとして、『オーシアン』の歌、歐羅巴を風動するの時にして、彼れが『アルボン』朝の爲めに、全權公使として伯林に駐在したるは、老ひたるゲーテが猶ほ文權を擅にするの時なりき。

シヤイトリブリヤンは、スタール夫人の如く、新なる社會には新

なる文學を要するとなせり、彼れは又彼女の如く、希臘 拉典の妄想的時代は已に過ぎ去りたりとなせり、只異する所はスタール夫人は、其理想を無限の進歩の中に求め、シヤートリーブリアンは、其の理想を基督教の中に求めたるに在り。去れどシヤートリーブリアンか『バイブル』の中に求めたる所は、道徳にあらざ、教條にあらざる也、彼れは詩、而かも新なる社會に適應すべき新なる詩を舊きものの中に求めたりき。

シヤートリーブリアンはスタール夫人の如く、政治上の自由主義に忠實ならざりき。彼れは一時拿破崙に仕へて、在羅馬外交官の位置を得たりき、去れど彼れは、忽にして拿破崙と相離れ、潔く其の職を辭して、反對黨となり、其機關雜誌を以て、拿破崙と戦ふたりき。故に彼れの文學も、拿破崙時代に在りては、スタール夫人の文學の

如く、反對黨の文學なりき。彼れも亦スタール夫人の如く、拿破崙を通して、ユルテイユラシンド戦ふたる大將軍にてありき。

エーゴカ生れたる一年前、千八百一年、彼れは『アタラ』を出版して、その文體の新奇なるの點に於て、世を驚かしたり。彼れは又たエーゴカ生れたる同し年、千八百二年『基督教の精神』を著はして、彼れの所謂基督教の精神は、ボスエ又は其他古文派の觀察の如く、道理的基督教にあらすして、感情的基督教、詩歌的基督教なるを闡明して、一世を風動せり。彼れの文體の特質は、其光明なるに在り、其齊調するに在り、其精美なるに在り、形ある實物を以て形なき精神の狀態を活動的に摸寫するに在り、直覺より獲たる想像を感情的に描寫するに在り。

フアীগ曰く『シヤートリーブリアンはフリアード以後佛國文學史

上の最大なる紀念なり』と、千八百年より殆んど十數年間は、彼れが佛國文界に於ける位置正に斯の如くなりき、去れどユイゴイか、『クロンウエル』の序文を公にしたる時には、彼は才衰へ、氣倦み、己に頽然たる老翁となり、而も文學よりも政治に熱心してありき。『ロイマンチック』に哲理を與へたるスタール夫人は死せり、『ロイマンチック』に形式を與へたるシヤイトーブリヤンは老ひたり、『ロイマンチック』に勝利を與ゆるの天職を帶ふるものは、誰れぞや。

スタール夫人、シヤイトーブリヤンは、『クラシック』と戦へり、去れど彼れ等の運動は、遠距離の發砲に似たり、彼等の彈丸は、『クラシック』の外郭を破りしに過ぎず、本城は依然として、存す、大學、學士會、劇場等最も文學界に勢力を及ぼすべき所は、總て『クラシック』の領有なりき。シヤレスノイヂエはシヤイトーブリアンに次

て、『ロイマンチック』派の運動の牛耳を執れり、去れど『クラシック』の堅城鐵壁は、猶ほ嚴然として聳へたり。

ラマルチンの『メヂターシヨン』は、『ロイマンチック』の詩として、社會を喜はしめたり、去れど『クラシック』の陣頭には旌旗依然として天に連れり。

然らば、ノイヂエ、ラマルチンが勝つ能はざる此強敵に勝ちて、スタール夫人、シヤイトーブリヤンの着手せし事業を完成するは、誰れの任ぞや。

四

ユイゴイの天職は、『クロンウエル』に始まる。『クロンウエル』は、佛國文學史の一大紀元也、新舊兩文學の分水嶺也、佛國文學に自由を與へ、新趣味を與へ、新文法を與へ、活動を與へ、進歩を與へた

し、『クラシック』の本尊、コルチイユ、ラシンの現實と自然に近からざるを論破したり。滔々たる四十七頁に亘る大文字、その鋒先きの向ふ所、一に『クラシック』の本據に在り。

『クラシック』派は狼狽せり、憤怒せり、恐懼せり、『クラシック』派に屬する文學者は、全く筆を投して降るに至らざるも佛國一般に於ては慥かに全勝を得たり。シヤレスノーヂエは『レビユーードバ』に於て、此書を歓迎し、其他『ガゼットドフランス』『グローブ』等諸新聞皆な此の勇將の技倆を賞揚し、彼の位地は隆然として聳へたり。十年前シヤートーブヤアンより最秀兒と呼ばれたる小兒は、今は、シヤートーブリアンに肩を接し來れり。五年前ラマルチンを好敵手として競争し、ノーヂエを先輩として感服せし青年は、今は、ラマルチンより大なるものとなれり。シヤートーブリア

ン以來蒙らしむべき頭を有せざりし『ロイマンチック』派大首領の冠は彼の頭に上げれり。幾多の文學者は、彼を中心として集り、彼れを師として集り、彼れを首領として集れり。

テオフ井ユゴイチエは當時の秀才也、ユーゴより七才の弟也。『クロンウエル』の序文を讀て、驚て曰く『是れシナイ山の十戒の如く吾人の眼に輝く』と、彼れは直に來りてユーゴの門人となれり。

アルフレッドミュッセーは、ゴイチエよりも大なる者也、ユーゴより八年の弟なれども彼れは二十才の時『西班牙伊太利物語』を作りて、名を著はしたり。彼れ壯にして憂鬱『予を此世に止まらしむるものは涙のみ』と悲み、老ひては心亂れ、絶望に死したれども、其詩の甘美にして熱情ある、佛國の詩人中稀に見る所也、而して彼れも亦ユーゴの旗下に來れり。

ユーゴーを仰て師とし、首領とする者の内にサントポーブあり。彼れユーゴーに後るゝ僅に二才、『クロンウエル』出版の翌年彼れが著はしたる『十七世紀の詩及劇の歴史と批評』は、驚く可き批評の才を現はしたりき。彼れは佛國の批評文學に一紀元を興へたる者にして、佛人は彼れを仰て『佛國批評文學の王』と稱す。而して彼れは後日彼れの流動せる性質が確定し凝結したるは『ウヰクトルユーゴーの世界の中』なりといへり。

ユーゴー、ボルテイルとミラポールとを評して曰く、ボルテイルは十八世の制法也、ミラポールは十八世紀の行爲なりと。余は正に之を移して以て、一般文學界に於けるユーゴーの批評を結ぶべし曰く、スタール夫人は十九世紀佛國文學の制法也、ユーゴーは、十九世紀佛國文學の行爲也と。

戯曲家としてのユーゴー

前樹は、後樹に影す、前時代は、後時代に影す、十九世紀半頭の劇曲は、實に、十七世紀の影なりき。

十七世紀の劇は、所謂『クラシク』なりき、其特質は、抽象的也、繩墨的也、哲學的也。語を切にして之を言へば、會話の体を假りて、自個の道德論を行はんとするのみ。詩を距る固より遠し。『クラシク』劇の弊は、悲劇と喜劇との區別に拘泥するに在り。

悲劇といへば、悉く非常の人物を現はし、非常の行爲を現はし、恐懼の情と哀憐の情とを刺激するを目的とし、其尊ふ所は、總て高雅なるに在り。従僕も、皇帝の如く、語り、乳母も、女王の如く、語

る。其人物は總て嚴格也。少しも狎れ親しむの狀なく、微笑すら苟もせざる也。喜劇といへば、只通常の人物のみを現はし、平易の行爲のみを現はし、人を笑はしむるを目的とするものにして、超越的人物は、一も其中に見る能はざる也。感情激發、尋常行動の軌道を逸脱するの活狀は、一も其中に見る能はざる也。只頭をよく動くを見るのみ、心の活動を見る能はざる也。

且つ『クラシック』は、西班牙劇の換骨也、彼れ國民的精神の結晶にあらざる也。彼れは又た抽象的、空想的にして、全く、地理、歴史の觀念なし。已に國民を離れ、地理、歴史を離る、彼れか現實を去るの遠き亦知る可き也。十七世紀の劇を代表せしコルチ井エ、ラシオンは實に斯の如きもの、代表にてありき。

十八世紀の前半にポルテールあり、佛國革命の準備者たる、大な

る天職の外に、劇の改良を圖れり。その劇は、哲學的の劇なれども、彼れは、セツキスピヤを揚げて、コルチ井エ、ラシオンを抑ゆるの方針を取れり。去れど彼れは只佛國の劇をして、稍地理と歴史とに一致せしむるの効を奏したるに過ぎず。十八世紀の後半に、フランソアヂエあり、ポルテールの旨義を繼ぎ、セツキスピヤによりてコルチ井エ、ラシオンを打破せんと欲し、『マクベス』『オテロ』等を譯して、世に示したれども、彼れ英文に深からずして、其志は躓けり。エーゴカ將に劇曲家として世に出てんとしたる時には、佛國の劇は依然として、十七世紀の舊衣を脱する能はず、劇の天下は全くコルチ井エ、ラシオンの天下なりき。

プロスペールクレピイオン十八世紀の初めに歎して曰く、『コルチ井エは天を取れり、ラシオンは地を取れり、我れに餘ます所なし』

と。ユイゴイにして、クレビイヨンの如き文學者ならしめは、彼れは亦十九世紀の頭に於て、斯くの如く歎したるべし、然れどもユイゴイの雄心は、コルチ井ユを壓せり、彼れの大志はラシーンを呑めり。彼れの希望は、コルチ井ユの天、ラシーンの地を取りて、己れの天地とするに在り。

彼れは如何にして戯曲家となりし乎、彼は如何にして新戯曲『クロンウエル』を作りし乎。彼れ『クロンウエル』の序文に戯曲を説て曰く。

詩に三個の時代ありて、各社會の時態に一致す。曰く歌、曰く叙事詩、曰く戯曲、第一の時代は、歴史的也、第二の中古時代は、叙事的也、近世時代は、戯曲的也。歌は、無窮を歌ひ、叙事詩は歴史を壯嚴にし、戯曲は生活を描寫す。第一詩の特性は、質朴也、第二の特性は單純也、第三の特質は眞實也。史詩家は歌より叙事詩に轉するの過渡を表識し、小説家は叙事詩より戯曲に轉するの過渡を素識す。歴史家は第二の時代に生し、批評家評論家は第三の時代に生す。歌中の人物たる巨大なる者なり、アダム、カイン、ノア。叙事詩の人物たる長大なる者なり、アトレ、オインスト。戯曲の人物たる人間なり、ハムレット、マクベス、オテロ、歌は想像を求め、叙事詩は壯大を求め、戯曲は現實を求め、要するに此の三詩は、三大源より流れ来る。曰くバイブル、曰くホーメル、曰くセツキスピア。

彼れ猶ほ進んで曰く。

『第一の歴史的の歌は、天の星、天の雲を反射する平面の湖に比す可し、第二の叙事詩は、岸、森、原野、都府を反射し、ついで流れて、戯曲の太平洋に注ぐ者也。戯曲の太平洋は湖の如く天を反射し、河の如く岸を反射す。然れども暴き深き有するは獨り彼れあるのみ。』
『戯曲は、完全なる詩也。歌と叙事詩とは其萌芽のみ。』

彼れは更に現實を求むる方法を示して曰く。

劇は反射鏡也。世界の中、歴史の中、生活の中、人間の中に存するもの

は、總て美術の能力を以て復寫せざる可からず、又た之を復寫するを得
可し。時代を讀み、自然を讀み、歴史を窺めて、事の現實特に風俗、品
性の現實を再現せしむるを力むる者是れ美術也。

讀て此に至れば、ユーゴの頭上正に二大光明の日照月臨するを
見るにあらざや。曰く『現實』曰くセツキスピヤ。即ち一は眞光、

他は假光。此の二にして一なる光は、彼れを照して、『クロンウエル』
 を作らしめたり。彼れを導て戯曲家の生涯に入らしめたり。彼れを
 助けて、コルチ井エラシンの妖星に打勝たしめたり。

吾人はセツキスピヤに多謝せざるを得ず。

吾人は遊星中の最早く光を受けたる遊星、遊星中最も大なる遊星
 か、他の遊星に向て光を紹介するの多勞に感謝せざるを得ず。曩き
 には、ポルテールに光を投し、ルーソーに光を投し、ゲーラーに光

を投し、今やユーゴに向て、光を紹介し、彼れをして『現實』の
太陽に親炙せしめんとす。吾人豈にセツキスピヤに感謝する所なく
 して可ならん哉。

且つセツキスピヤは偶然の事實よりユーゴを助けたり。

千八百二十二年英國俳優の一组は巴里に來り、セツキスピヤを演
ぜんとして、『クラシック』に悪まれ、セツキスピヤは佛人の悪魔とな
れり。千八百二十七年九月ユーゴが『クロンウエル』を著はす一
 月前チャレス、カンブル男女の俳優を率ひ、倫敦より巴里に來りしが、
局面一變、巴里人の歡迎する所となれり。特に女優中にスミツシヨ
ンと名くる愛蘭生れの一小女あり、美にして善く舞、巴里市民喜ん
で殆んど狂す。青年文學者ベルリオなるもの最も彼女を愛し、五年
 の後結婚するに至れり。『クロンウエル』を著はしたる翌年、千八百

二十八年の五月英のエドモンドキーン佛國劇場に現はれ、セツキス
ピヤの『リチャード三世』を演じたれども、『クラシツク』は之に抗敵
する能はさりき。

佛國當時の劇場はユルチ井エ、ラシインの劇場にして、特に最も
多くラシインを演じたりき。故にセツキスピヤを佛國の劇場に演ず
るは、是れセツキスピヤ自らユルチ井エ、ラシインの領土を侵奪す
る者也。『現實』の光自ら『クラシツク』の暗を照破せんとする者也。
是れ豈に『ロマンチツク』の爲めに、ユイゴ一の爲めに、先驅を
なすものにあらずや。

二

『ロマンチツク』の戯曲にして、佛國劇場に上りしは、アレキサ
ンドルヂユイマの『エンリー三世』を以て始めとなす。是れ實に千

八百二十九年の始めなりき。ユイゴ一の『クロンウエル』は二年前
に世に生れたれども、演劇場に於ては、後進の『エンリー三世』に
先んぜられたり。ユイゴ一の『クロンウエル』を作りつゝあるや。

『國會は余が巾着の中に在り、王は余がポケットの中に在り』と叫び
たる巨人を併すべきものを當時の名優に求めて、惟一のタルマを得
たり。而して此再ひ得可からざるタルマは、『クロンウエル』の成る
少時前に死せり、是れ『クロンウエル』の劇場に上らざる原因の重
なる一なる可し、其他『クロンウエル』は實地の劇場に試みるに適
せざる所も少なからさりき。故にユイゴ一は、更に進んで劇に上ほ
す可きものを作れり。千八百二十九年六月一日筆を起し、同二十七
日に至りて、『マリヨンドロルム』成れり。戯作成るや、文學者を自
宅に集めてユイゴ一自から之れを朗讀せり。佛國第一の劇場『フラ

『ソセー』の座主テイロル、風俗小説の大家たるバルザック、歴史家にして辨者たるウヰルマン、『エンリー三世』の著者アレキサンドル、チエーマを始めとして、ユイゴに師事せるサンボワ、アルフレット、ミユツヒ等當時文學界の名星皆なよく來り會し、朗讀は大喝采を以て聽かれたり。公平なるアレキサンドル、チエマは、後年當時の所感を記して曰く。

余は歎賞を以て聽けり、然れどもその歎賞たる、悲しみを以て彩られたりき。余は終に斯の如く雄勁の文牒に達する能はざるを感したれば也。余はテイロルの傍に座せり、朗讀終るや、テイロルは余に向て意見を問へり、余は之を以てユイゴの最傑作の一なりと證明せされは余は大に誤れるものなるを語りき。……余は赤心よりしてユイゴに向て祝辭を述べ、且つ文牒に賞しき所の余は、彼れの文牒の莊麗なるに壓倒せられたるを彼れに語りたり。余若し十周年を犠牲として、彼れの文牒に達するを得ば、余は喜んで兜を脱して彼れに降伏したりしならん。

アレキサンドル、チエーマ（父）は、ユイゴより一歳の兄也。

彼れは、歴史小説家の王として文學史上に峙つ者也。彼れの特色は、小説を以て人を樂ましむるに在り。小説の形を以て、歴史を語り、人間に快樂を與ゆるは、チエーマのチエーマたる所なり。然れどもユイゴが『マリヨンドロム』を朗讀せし當時のチエーマは斯の如きチエーマにあらざりき。彼れは未だ一の歴史小説を作らざりき、即ち彼れは小説家にあらざして戯曲家なりき、而かも『エンリー三世』の成效は戯曲家として彼れの成效を豫告してありき。然るに彼れ忽ち其方向を一轉して、小説家となりしもの、『マリヨンドロム』の朗讀を聽き、戯曲家としてユイゴに及ばざるを悟りしが爲めにあらざるなきを知らん哉。

『マリヨンドロム』は砂上の眞珠の如く、劇場の諸座主に争はれた

りき。特に『フランセー』座のライロルと『ホルトカンマルタン』座の監督クロツニエとの競争は最も激しかりしが、遂ひにテイロルの勝に歸し、佛蘭西第一の文學者たるユーゴーの戯曲は、將に佛蘭西第一の劇場に演ぜられんとす。然るに妨害は忽ち意外の邊より來り、即ち政府の原稿檢閲也。『マリヨンドロム』の第四段目中、路易十三世が宰相リセリユの爲めに、機械の如く、弄ばざるの實情を寫せる所は、シヤールレス王の思み嫌ふ所となり、その新戯曲は王家に不敬なる文句ありとして全く演行を禁止せられたり、ユーゴーは時の宰相マルチニヤツクを訪ふて、詰りたれども、要領を得ず、更にシヤールレス王に謁見を請ひ、親く辯ずる所ありしが、王は自由を與へずして、黄金を與へんとせり。王は『マリヨンドロム』の興行を許さるが爲めに、ユーゴーの心を失はんとを恐れ、二千フランの

年金を六千フランに増さんと申されけるにユーゴーは即座に之を辭せり。彼れは、黄金よりも、自由を愛し、王命よりも良心を重しとす。彼れか、年金を辭したるは、情を以て之を拒みたるにあらず、即ち怒に驅られたるにあらず、恨に使はれたるにあらず、只良心に循ひしのみ。世豈に良心より平静にして又た果斷なるものあらん哉。彼の果斷は、僞忠臣等を驚かしたり。十數年前彼れの才能を贊美したる王黨の新聞は、今や彼を傲慢なりと叫ひ、不忠なりと叫ひ、不敬なりと叫ひ、逆賊なりと叫ひたり。忠臣の名の下に隠るゝ僞善者等は、ユーゴーを回りて狙々として吠へたり。之れに反し、反對黨の新聞は、嘖々としてその果斷を贊し。其友人及『ローマンチツク』の門弟等は各詩を送りて、その徳操を頌したりき。斯くの如くして、『マリヨンドロム』は王の妨害に打勝たれたり。

去れど、ユーゴー夫人の言へる如く、ユーゴーは妨害の爲めに勇氣を失ふ人にあらず、彼れは更に佛國第一の劇場に上ほす可き可きものを作れり。九月十七日稿を起こし、同二十五日脱稿す、『エルナニ』是れ也。此戯曲たる『マリヨンドロム』の如く、王、シヤイレスに沮まれたれども、其妨害は、『マリヨンドロム』の妨害よりも稍小なりき、幾多の附箋はユーゴーをして『エルナニ』中の警句たり、眼睛たる所を削除改竄するの己むを得ざるに至らしめたりき。

一難排し去りて、一難來る。俳優は『エルナニ』に反對する『ドナソール』は『エルナニ』中第一の役也。大なる悲劇女優マイルス之を演せんとす。マイルス年五十。老練の技、神に入る。自任甚た高く、冷眼を以て演戯の改良を見る。彼女は『エルナニ』を喜ひず、臺詞の意に通せざるものは擧げて、修正を求む。而して女優の修正を

求むる所は、ユーゴーの最も意匠を凝らしたる所なりき。ユーゴー禮貌温言以つてマイルスを諭し、猶ほ頑然動かさるに及んで、ユーゴーは、斷々乎、マイルスに向てドナソールに份するの役を停めんとを請ふ。未だ曾て戯作者に向て下げたる事なき彼女の強項始めて屈下す。當時の戯作者は殆んどマイルスの奴隸なりき、マイルスを標準とし、マイルスを中心とし、マイルスの役に適す可き戯曲を作りて、マイルスに諂ひたりき。作者を俳優の奴隸より救ひ、俳優をして作者に服従せしむるの新例を開きたるは、實にユーゴーの力なりと謂はざる可らず。

ユーゴー曰く大詩人は大山の如し、彼等は多くの反響を有すと。『クラシック』か、ユーゴーの戯曲興行に加へたる妨害の程度即ち其の反響の程度は以てユーゴーが文學界に及ぼしたる勢力の程度を測

る可き也、從來『フランセー』座に興行したる戯曲は、ユルチイエ
ラシオンを崇拜する學士會員の供給する所なりき。故に『エルナニ
ー』を『フランセー』座に演ずるは、『クラシック』派に取りて、その家
宅を奪はれ、其の資産を奪はるゝの感なきを得ず。彼等は、則ち先
づ王權を假りて、『エルナニ』を妨害せんと試めり。七人の學士會
員は、シャールレス王に請願書を呈して曰く『フランセー』座は新派の
戯曲を拒絶し、眞個に美と眞とを玩味する作者の爲めのみ保存せ
られよと。之に止らすして、彼等は更に王權によりて『エルナニ』
の演習を禁止せんとを請願せり。去れど暗愚なるシャールレス王は彼
等よりも賢明なりき。王は之に答へて曰く。

諸君よ、文學問題における余の位地は、汝等の如く、只聽從者の中に在
り。

『クラシック』は一層卑劣なる手段を取れり。或は間者を演習中の
劇場に放ち、其戯曲の一言半句を盗み得て、之に悪評を加へたるも
のを世に公にし、之を笑殺し、之を罵殺せんと試み、或は政府の檢
閲官と聯合し、檢閲官より聞き得たる戯曲の文句を最も可笑く最も
醜惡に改竄して、之を公にし、而して以て之を傷けんと計りたり。
去れど其妨害は『エルナニ』の妨害とならずして、却て吹聴とな
れり。巴里の市民は頭を擧げて、熱心に第一興行を待つに至れり、
チエール・コンスタン等著名の文學者は皆な熱心に參觀を請ふに至れ
り。

『エルナニ』の興行は、『ロマンチック』劇と『クラシック』劇
との運命を決す可きウヂトルロイなりき。『クラシック』の間者たる
専門喝采者は興行の夕、千八百三十年一月廿五日の夕、ユイゴイの

看破する所となりて、第一に退はれたり。而して専門喝采者に代はる可き『ロマンチック』の義勇兵は、肩に垂れたる長髪、猩々緋の胴服を以て最も人目をひけるテオフ井ユ、ゴーチエ、『クラシック』派の壯士より擲れたる甘藍の莖にて其の面を傷けたる、バルザック等を將軍として、幾多の青年文學者隊を成し、列を組み、劇場中最も妨害者の隠るへき片隅を先守して其陣となせり。佛國學士會員が引率したる『クラシック』の一隊亦來て之れと對陣せり。私語、熱罵、冷評、嘲弄の榴散彈は幕の未だ開けざる前、已に『クラシック』派の陣より『ロマンチック』の陣に向て發射せられたり。第一段エルナニーが深紅の幕を以て掩はれたる寢室の戸を叩きて、情婦を訪ひ來るの際、シヨセフアールコイアルが耳をすまして其聲音を聞きて獨語する所に至りて、滿場風怒り、波號ひ、兩派の間

に大激戦ありしか、第二段目エルナニーと其戀の敵たるドンカアロと戀の恨より相罵るの所に至りては、『クラシック』の陣已に崩れんとし。三幕四幕に至りて『クラシック』派益敗色あり、五幕目に至りて遂に『ロマンチック』派の大勝となり、滿場靜寂として、只時に感歎の拍手を聞くのみなりき。

『エルナニー』第五幕演せらるゝの前、出版者マムなるものあり、ユーゴの許に來り六千フランを以て、『エルナニー』の原稿を買へり。此時天地の間ユーゴの所有として只五十フランありしのみ。

第一興行の翌日文學界の老武者、當時文學よりも政治に身を委ねたる過去の偉人、シャトリアンはユーゴに一書を送りて其才氣を稱賛し、彼自らの文星將に落ちんとする時に世界に現はれたる明星なりとして、彼れの成效を祝したりき。

『エルナニー』は五十三夜の間興行したりき。第一回に敗れたる『クラシック』派は、一回又一回、興行の續く間反對せり、而して『ロマンチック』は一回又一回之と戦ひて之に勝てり。毎夜操り返へざる、戯曲に就き、その『クラシック』派より、叱咤せられ、罵詈せらるゝ所を草稿に記るしたるに、終に及んで、戯曲の全身敵彈を受け、その叱咤罵詈の痕を止めざるは一行半句もあらざりしといふ、亦た以て反對の如何に激しかりしかを察す可し。

當時多くの新聞紙は、王權の奴隸たると同時に『クラシック』の奴隸たりき。故に『ツヨルナル、デ、デパー』及其他一二の新聞雜誌を除くの外は、一として、ユーゴの敵ならざるはなく。その最も不正なる批評中には『ロマンチック』派を指すに懶儒人、小人、放蕩子、狂夫の語を用ゐ、『エルナニー』を以て極めて不潔にして厭

悪すへき作なりと罵るに至れり。

『エルナニー』によりて挑發せられたる文學の戦争は、眞の戦争の如く、血を嗜しむに至りたりき。ユーゴの案上には、脅迫狀箭の如く來れり。其一には汝若し汝の悪戯曲を撤回するにあらざれば、汝は速かに殺るさる可しとの文句ありしが、ユーゴは之を讀んで只微笑せるのみなりき。ユーゴの劇場より歸るや、彼を途に要撃せんとするものすら現はれたり。友人門弟は毎夜ユーゴを劇場より其宅迄護送したる程なりき。彼れ一夜明燈の下、『秋葉』を記述す、忽ちにして大なる響あり、忽ちにして、窓の硝子板粉塵す、街頭人影を見ず、室内、一彈丸あり、其頭より數寸の所を通過せるもの、如く、其友ブーランゼンが寫ける肖像を貫くを見る。此一事以て其他を類推す可し。

『エルナニー』は『フランセー』座より巴里全跡に、巴里より、佛蘭西全國に其光を發射し、佛の山川草木をして、光加影かを映射せしむるに至れり。『エルナニー』は、全國の談柄となれり、國民の問題となれり、或る文學に熱心なるツィローズの一少年は『エルナニー』の争より決闘して身を殺すに至れり。

『エルナニー』は、佛國文學史上の一大紀念なり、アレキサンドル・ヂユーマの『エンリー三世及其朝廷』は、『ロマンチック』派新戯曲の先登なりと雖、其成効は寧ろ僥倖の成効なり。是れ恰も敵の不意に乗して、勝を制したるが如し。眞に戦ふて眞に勝ちたるにあらざるなり。ユイゴの『エルナニー』に至りては是れ正々堂々の戦なり。先づ『クロンウエル』の序文に於て、宣戦し、敵をして、十分に、我陣立を知らしめ、我軍略を知らしめ、我兵力を知らしめ、

十分の準備、十分の用意を以て戦はしめたるものにして、即ち劇に於ける『ロマンチック』と『クラシック』との運命は實に『エルナニー』の勝敗によりて決したる也。

エルマンヘルガメニーは其佛國文學史に特筆して曰く『エルナニー』は將に死せんとする悲劇(クラシック)に死の一撃を加へ、ルイ・フィリップ時代の戯曲の模範となれり』と。

三

『エルナニー』は斯の如く、『クラシック』劇を開ち、『ロマンチック』劇を開きたる運命の鍵となりぬ。去れど十七世紀の影たるコルテイ井ラシーンの殘黨は猶ほ隱家を有したりき。曰く、王權、曰く、新聞紙。是れ『クラシック』の傾ける運命を僅かに支ゆる殘黨なりき。千八百三十年七月の革命は、『クラシック』派を衰龍の衣の袖に

隠くし、『マリヨンドロム』を検閲官の手に握り殺さしめんとしたる
 シャーレス王を追ふて、未だ王權濫用の味を知らざるルイフ非リッ
 プ王を迎へたり。『クラシック』派は之れが爲めに一時王權を利用す
 るの機會を失ひたると同時に、エーゴは禁止せられたる『マリヨ
 ンドロム』を世に出すの機會に遭遇せり。『フランセ』座は其興行
 を懇請せり、友人は其興行を勸告せり、去れどエーゴは之を許さ
 ざりき。

一年の後、千八百三十一年八月天下シャーレス十世を忘るゝに至
 りて、彼れは始めて『マリヨンドロム』を『ホルトサンマルタン』
 の劇場に演ずるを許諾せり。

千八百三十年七月の革命以來政治上の大問題湧くが如く、人才は
 多く文學界より政治界に吸収せられ、『エルナニー』の爲めに『フラ

ンセー』座に戦ふたる『ローマンチック』の年少文學者にして今は
 全く文事を廢して、政治に奔走するもの少なからず。『マリヨンドロ
 ム』は實に此不運なる時に演ぜられたり。學士會員が引率せる『ク
 ラシック』派の妨害は『エルナニー』の時に劣らすして、『マリヨ
 ンドロム』の爲めに戦ふ勇士の數は、『エルナニー』の時よりも、少し。
 去れど『マリヨンドロム』は、『エルナニー』に劣らざる勝利を得て、
 六十一夜興行を續けたり。劇場外の妨害は『エルナニー』の時より
 も甚しかりき。八月十二日の『ショルナルオブシエル』新聞は一
 行も其前日に『マリヨンドロム』の第一回興行ありしを掲げざりき。
 而して之を掲げたるもの、中、唯一の『ショルナルデアベ』を
 除くの外は、悉く『クラシック』の機械となりて、之を罵れり。加
 之、『クラシック』派は『マリヨンドロム』に似たる名義を附したる

滑稽戯を各所の小劇場に演じて『マリヨンドロム』の成效を妨げたり。ユーゴの友人は耐へずして嚇怒せり。去れどユーゴは泰然として心を動かさず。最も騒かしく境遇に在りて最も静かに著作せり。千八百三十二年『ルロアザミューズ』を著はし、又た『リユックレボルチャイ』を著はす。前者は詩劇にして後者は散文劇也。テイロル前者を請ひ得て、之を『フランセー』座に演す。千八百三十二年十一月二十二日の第一興行は、『エルナニー』よりも『マリヨンドロム』よりも數層の妨害に遭ひぬ。『ローマンチック』派の喝采者は、非常の熱心と勇氣とを以て戦ひたれども、『クラシック』の叱咤の聲は殆んど全勝を獲、ユーゴの名は、遂に喧騒の中に没了せられたり。ポールフナーシー當夜の光景を記して曰く、

滿場騒ぎ立ちユーゴの名は叫喚叱罵の海底に沈み去りたる時に、ユー

ゴの顔色は只少く感激の状を呈したるのみにして少しも失敗に絶望したるの色なく、彼の面貌は岩の如く確かにして荒らしに抗抵したり。幕閉つるや彼れは俳優に向て且つ謝し且つ勵まして曰く、

『汝は今夜少く騒ぎ亂されたり、去れど明日は必らず然らざる可し』
 明日、明日、是れ彼れの勇氣なりき、彼れの希望なりき、彼の生命なりき。彼れは如何なる場合にも明日あるを忘れさりき。

第一興行終るや。殆んど總ての新聞紙は『ルロアザミューズ』を酷評したりき。舊き思想を代表せし王黨の新聞も、新しき思想を代表せし共和黨の新聞も與に『クラシック』の舊き衣を穿ちたるを以て異口同音に『ルロアザミューズ』を罵れり。『ルロアザミューズ』に對する當時の批評は殆んど批評にあらずして讒誣なりき。其一例を擧ぐれば左の如く甚たしきものあり。

ユーゴ君の従前の戯曲は善美なる思想を少しは所持し、感情、道德、

禮義に似たるものを所持したりしか、『ルロアザミューズ』に至りては、
 總ての限界を踏み外つし、歴史、道理、道徳、美術家の品格、禮義は總
 て脚下に蹂躪せり、是れ彼れの進歩なる者也……彼は歴史的人物假令へは
 フランゾア一世の如き、詩人クレマンマロの如き人物を諷刺す……其戯曲
 全跡は奇々怪々也。歴史は無視せられ。最も高尚なる人物の性格は諷刺
 諷刺せらる其戯曲たる、何の價直あらず、只怖る可きもの、卑しむべき
 もの、不道徳なるもの、混和のみ。
 斯くの如くして、第一回興行は、殆んど敵を天下に作れり。斯く
 の如くして第一回興行は殆んど失敗に終れり。去れどユーゴーは黒
 雲の後に太陽あるを信せり。嚴霜の後に春風あるを信せり。彼れは
 第二回の興行に成効せんとを期したりき。第二回亦失敗せば又其次
 に成効せんとを期したりき。然るに意外なる妨害は第一興行の翌日
 復た又天邊より來れり。
 『ルロアザミューズ』の興行を禁するの王命來れり。是れより先き、

ルイフ井ツプ王の平和政畧は、國民の膨脹政畧と相容れず。政府政
 畧の聲漸く高く、千八百三十二年の夏には巴里に一揆起り、街上血
 を流かし、政府の基礎愈危ふからんとす。是に於て一度ひ寛大なり
 し政府は、今や言論の自由を束縛するの必要を感じ來り、曾てツヤ
 ユパン俱樂部員たりしルイフ井ツプ王は、今や漸くに路易十六世に
 近似し來れり。『クラシック』派の巢窟たる學士會員の諸老先生は則
 ち以て時乘すへしとなし、ルイフ井ツプの宰相アルグーを訪ひ、
 『ルロアザミューズ』は善良の趣味、公衆の道徳に補益する所なきの
 みならず、却て不良、却て不正。あまつさへルイフ井ツプ王に對
 して不敬の語を保有する者なることを讒したり。而してルイフ井ツ
 プ王の内閣は遂に禁止の命を下せり。ユーゴーは禁止の命に服する
 能はざりき。彼れの良心は不正なる王命に従順する能はざりき。彼

れは先づ宣言書を發して、禁止せしものと、禁止せられたるものと。是非を天下の公議に問へり。彼れ又た行政の外に獨立すべき裁判所に向てその是非を訴へたり。彼れの告訴は王權の奴隸たりし裁判所に敗れたり。去れど彼れは天下の公判に勝てり。彼れの法廷に出るや、數百の傍聴者は、拍手して、彼れを迎へたりき。彼れの法廷より歸るや、群衆道に擁して彼れに喝采を與へたりき。

ユーゴの不従順は、王黨新聞の毒牙を免かれざりき。「不敬」なる文字の濫用者たる王黨新聞は、ユーゴの良心より出てたる大丈夫の行爲を不敬の行爲となし、更らに王に不従順なる彼れが、前々代の王路易十八世より受けたる二千フランの年金を今猶ほ受領するの撞着なるを非難するに至れり。彼れが清白の心は、曾てシヤール王に向て、年金の増加を拒絶せり。彼れ豈に黄白に戀々たるもの

ならん哉。彼れ則ち鄭重、謹慎にして而も品格ある一書を政府に呈して年金を辭せり、當時ユーゴ逆境に在り、歳入固より多からず、彼れは年金を辭したるが故に、生活に苦しむの人となれり、去れど彼れは年金を辭したるが故に、良心に平らかなるの人となれり。

果して勝利の閃光は黒雲を破れり。「ルロアサミューズ」禁止せられて、間もなく「アレル」座に演じたる「リユークレポルヂヤ」(千八百三十二年の終に演ず)は例の如く罵詈譏誣せらるゝに始まりたれども、遂に類なき大勝利を以て終れり。是れより先き「リユークレポルヂヤ」を演ぜんとするや。「クラシツク」の妨害を慮かり、戸を閉ち、人の出入を禁して、之を演習す。ユーゴを首領と仰きたるサントポーブ、觀んことを求む、ユーゴ之を許せば、豈に圖らんや彼れ劇場外に去るに及んで、「リユークレポルヂヤ」を以て背理

不正の作なりと叫て、ユーゴに反かんとは。信義なきポーアの悪評は、更に大なる悪評を産み、數多の新聞は、『リニエクレボルヂヤ』未だ興行せられざる前に之を罵り、之を詆れり。然れども之を興行するに及んでは、『エルナニー』よりも、一層大なる勝利を獲たり。是れ迄罵詈譁の海底に沈みたるユーゴの名は、劇場を壞さん計りに轟く喝采を以て迎へられたるのみならず、観客は、ユーゴに向て、観客の面前に現はれ出んことを請ふに至れり。座主も頻りにユーゴが観客の望に従はんことを懇請したれどもユーゴは之に従はざりき。是に於て、群衆は、ユーゴが劇場より出るを待ち、彼れの馬車を控へて之を止めたり。彼れ止むを得ず、彼れを擁しつゝ喝采する數百の群衆に伴はれ徒歩にて其家に歸りたりき。

『リニエクレボルヂヤ』は、ユーゴが戯曲家として成効の絶頂

なり。見渡せば、『クラシツク』派は、已に弓折れ、矢盡き、旗倒れ、陣崩れ、又戦ふの力なく、僅に存せる、學士會の殘壘に蠢々然たり。是れより後、數年は殆んど全勝の時代にして、又た『クラシツク』の甚たしき妨害を見ず。千八百三十三年十一月六日より『ホルトサノマルタン』座に演せられたる史劇『マリーリーチエイドル』の如き、千八百三十五年四月二十八日より『フランセ』座に演したる散文劇『アンゼロ』の如き、皆與に十分の成効なりき、千八百三十六年より形勢亦一變し、『クラシツク』派の反動、亦來り迫る。『ノートルダムドパリ』より化成したる『ラ、エスムラルダー』と名くるオペラは、千八百三十六年十一月十四日『ロイヤルアカデミー』に演じて、叱咤せられ、千八百三十八年七月より、八月にかけて作りたる詩劇『リニエブラ』は、十一月八日『ルチサンス』劇場に演じて、五十回

の興行一として『クラシツク』派の爲に叱咤を免るゝ能はざりき。千八百四十三年三月八日に興行したる『レビエルグラーブ』に至りては、殆んど四面敵圍の中に陥り、『ローマンチツク』の大主義の爲めに殉死せざるを得ざりき。

蓋し死灰も亦燃ゆることあり、老死に瀕せる『クラシツク』も亦血氣の昔に歸る瞬間なきを得ず。『クラシツク』最後のリバイバルは、已に波瀾の如く寄せ來れり。『クラシツク』派のルーグルベは、千八百三十九年に『ルイスドリニヨロム』を著はし、同派のアレキサンデルスローメーは、千八百四十一年『レグラチナツトル』を著はし、與に俱に死に臨める『クラシツク』派を助け起して、『ローマンチツク』派に一撃を加へぬ。ボンサルの著『リユクレー』に至りては、最も驚くべき勢を以て、ユーゴの『ラビエールグラーブ』に迫り

來れり。此の時『ローマンチツク』派の状態は、已に一變して舊時の觀なし。十年、一日の如く、『ローマンチツク』の大旨義の爲めに忠戦する重なる文學者は、只ユーゴあるのみにして、其他或は政治に身を委ねるあり、或は戦に倦みて文學を廢するあり、或は嫉妬の爲めに反逆を企つるあり、『エルナニー』興行に際して、『ローマンチツク』の爲めに戦ふたるもの今は半ばユーゴの敵なり。

彼等は、冬林の松柏の如く、孤立せるユーゴを助けざるのみならず、ユーゴの『ラビエールグラーブ』と戦を挑みつゝあるボンサルの『リユクレー』を攻撃せざるのみならず。ボンサルを揚げて、ユーゴを抑へんとす。ラマルチンの如きは其一人也。彼れが特にボンサルを優待して、其の多年の友ユーゴを冷遇するや。彼れの崇拜者たるシヤードラックレニールをして、彼れを非議せ

しむるに至る、其言に曰く、

ユーゴ、ラマルチン、ウヰニ、サントボープは、久しく「ロイマン
 チック」派の先導者として吾々年少者は之に推服したりき。吾人の性情
 は美に誘はれ、吾人はセツキスピヤの奴隷となれり。セツキスピヤの勢
 力は、「エルナニ」「マリヨンドロム」「ルロアファミユーズ」及「リュイブ
 ラ」の傑出したる光輝の中に示現したりき、今や「グラシック」派は「リ
 ュッククレー」中に、若干の美を發見したるを以て、其美を誇張して以て、
 ユーゴを抑へ、其反對者たるボンサルを揚げ、其衰運を挽回せ
 るを欲す、吾人はラマルチンがボンサルを助くるを憤る者也。吾人は泣
 く泣くも、ラマルチンが吾人の主眼に背くのを罪を責むるの已むを得ざる
 を見る也。
 曾て、「メヂターション」を以て、「ロイマンチック」の詩界を照ら
 し、「ロイマンチック」の牛耳を握りシラマルチンにして、今は則ち
 斯くの如し。劇に於ける「ロイマンチック」が、衰微に傾く、亦其
 故なきにあらざる也。ユーゴの「ラビユルグラーブ」がボンサル

の「リュイックレー」と戦ふて一敗したるもの、ユーゴの力弱き
 か爲めにあらず、ボンサルの力強きか爲めにあらず、「クラシック」
 復活の勢大なる爲めにあらず、「ロイマンチック」派の熱心足らざる
 か爲め也、信義至らざるか爲め也、節操堅からざるか爲め也。
 ユーゴの戯曲家として生涯は「ラビユルグラーブ」に終れり。「ラ
 ビユルグラーブ」の劇場に全敗するや、彼れは筆を投して念を戯作に
 絶てり。

四

セツキスピヤの戯曲、其眞價を世に認められたるは、大凡死後百五
 十年の後に在り、ユーゴの戯曲、千八百四十三年文學上の反動に
 打勝たれ、爾來二十餘年間、暗黒に没したる亦怪むに足らざる也。
 千八百六十七年拿破崙三世、博覽會を巴里に開きて、改造せる新

都府の美を世界に誇らんとするや、形而下の美は君王の命に従へり。金銀、珠玉、錦繡、鐵、石材は、悉く、君主の意の如く、其美、其精、其巧、天下を歴し、世界に誇るべきものを出せり。去れど形而上の美の以て、世界に誇る可きものは如何。拿破崙三世、新建築の美に伴ふべき戯曲の世界に誇る可きものを未ひるや、劇場の管理者は、總て口を揃へて曰く、無しと。美術掛の大臣又た上申して曰く、新に絶妙の戯曲を得るにあらされは、佛國文學の枯衰を世界に知らざるものにして、佛國の耻辱となる可しと。去れど三世は如何ともする能はず、只窮せり、只憂へり。忽ちにしてユーゴーの名は、管理者の間に私語せられたり。三世を憚かりて私語せられたり。三世は固より『拿破崙』の著者によりて作れたる戯曲を以て、世界に誇るを好まさりしなる可しと雖、他に誇る可きものなきを以て、彼

れは苦虫を噛み下して、其興行を黙許せり。『エルナニー』は『フランセー』座に、『リニイブラ』は、『オデオン』座に各興行せられたり。三十七年前『クラシック』派より妨害せられたる『エルナニー』は、八十餘夜の興行、雷の如き喝采の中に通過せり。己れを叛逆人と罵る逐客の餘光を假り來りて、虚榮を世界に示すに至りては、拿破崙三世も亦憐れむ可き也。

同年『ゲルンセーの聲』出るに及んで、興行は再び禁せられ、ユーゴーの戯曲は、壓制の暗蔭中に没せり。

拿破崙三世の壓制、没落するに及んで、ユーゴーの戯曲は、復活せり、千八百七十七年『エルナニー』を『フランセー』座に興行して、大勝利を獲てより、佛國の檜舞臺は殆んどユーゴーの獨占する所となれり、而してユーゴーは戯曲の第百回興行に達する毎に、盛

大なる饗應を張りて之を祝せり、『エルナニー』先づ祝せられ、次に『リュイブラ』亦祝せられ、其門弟が『ノートルダムドパリ』より變作せし戯曲亦次に祝せられ、千八百八十年に至りて、ユーゴの三戯曲第百回興行に達せり、而して千八百八十年は、又た是れ、『エルナニー』か劇場に上りてより恰も、五十年に當るを以て、『彼れ』の天才と光榮との金婚式』なるものを『フランセ』座に執行せり、大喝采の中に幕落ち幕上るや、花環と棕櫚葉とを以て飾れる柱脚の上に安んぜられたる、ユーゴの半身像大喝采の中に現はれ、ドサソールに仿する名優、サラベルンハール、その手に棕櫚の枝を持して半身像に接近し、フランソワコッペリによりて作られたる詩を唱し、次に有名なる劇評家フランソワサルセー氏か與へたる起てよ、の號令と與に満場起立し、ユーゴ一萬歳を唱へたり。而して彼れの

八十歳の誕生祝日に當りてや、巴里の諸劇場は總てユーゴを祝するの詩を唱讀して以て、彼れを榮とせり。ユーゴに次て、戯曲家として著名なるアレキサンドルデュマ(子)エミールオーギエあり、各種の戯曲を作れりと雖亦是れ『ロマンチック』派の分派たるに過ぎず、エミール、ゾラ現實自然の旗を小説界に擧げ、ユーゴの死後更に現實の感化を戯曲に向て及ぼすに至りて、ユーゴの戯曲は、漸く微茫に入る、去れど彼れが戯曲界に與へたる勢力は依然として逞ましく、彼れが戯曲界に與へたる偉勳は、依然として、薫はしく、彼れが戯曲家としての生活は依然として、高大に、彼れは依然として佛國五百年の文學史上の最高巔たるを失はず。

五

之を要するに戯曲家として、他の妨害反對に遭遇せし、ユーゴ

の如きは、世界の文學史上未だ曾て有らざる所たると同時に、生前、
成效の勝々たる、ユーゴーの如きは亦稀に見る所也。

ユーゴーは、破壊者にして又た建設者也。ユルチイエ、ラシンの
抽象的、細墨的戯曲の舊軀を破壊して、文學界の專制政治を倒ほし
たる者はユーゴー也、自由、「ユーマニター」、自然、現實を基礎とし
て、ユルチイエ、ラシソ、モリエル、デスカルテ等が夢想する能は
ざる新建築を立てたる者は、ユーゴー也。ユーゴーの戯曲界に於け
る、改革を作らずして、殆んど革命を作れり。文法は彼の爲めに全
く一變せり、文軀は彼れの爲に全く一變せり、豈只文法、文軀のみ
ならんや、其着眼點亦彼の爲に一變せり、其精神亦彼の爲に一變
せり。ユーゴーが千八百二十七年「クロンヴェル」の序言中「戯曲
は現實也」と論斷せし以前に當りて、佛國文學者中、誰れか「戯曲

は現實也」といひ得たるものある乎。彼れは實に哲理に於ては、現
實派の開山なりと謂はざる可らず。ソラの先輩として佛國現實派の
首唱者と稱せらるゝバルザックか、所謂「現實」を唱へたるは、千
八百四十年後に在り、今日現實自然派の首領とするソラか「現實」
を唱へたるは、千八百六十年後に在り。ユーゴーの哲理は、バルザ
ックに入り、バルザックの感化は、ソラに入る。所謂現實なるもの
を以て、今の所謂現實派の創作の如く信するは、淺識の至なりとい
ふ可し。
哲理に於て、現實を認めたるユーゴーは、戯曲自身に於ては、未
だ完からざりき。ユーゴーの戯曲を以て、ユルチイエ、ラシソに比
すれば、數層客觀的也、數層現實的也、數層自然的也。去れど之を
以てモツキスピアに比すれば、數層主觀的也、數層抽象的也。數層

不自然的也。ユーゴー其戯曲を作る脚色を示して曰く。

最も醜惡なる肉體の不具者を取りて、社会上最も卑賤なる、最も低下なる境遇に置き、不運なる光を以て、總ての方角より幸運と對照せしめ、然る後彼れに一個精靈を賦與し、更に其精靈に向て、男子に於ける最純の感情、即ち父たる感情を與ゆるこゝろあらは如何。此の崇高なる感情は卑陋なる人物をして、汝の眼前に一變せしむ可し。小なる者は大となり、不具なる者は、美なる者となる可し。『ロア、ザミューズ』は即ち此本質を有する者也。『リユークレホルツヤ』、亦然り。最も醜惡なる心靈の不具者を取りて、婦人の心に於て最も非常なりとする境遇に置き、且つ其の肉體は美に、其の地位は、高麗ならしめ、然る後に、此の不具なる心靈の間に、女子に於ける最純の感情即ち、母たるの感情を交へ、怪物の中に、母の心を置かば如何、怪物乃ち趣味を生じ、怪物汝を泣かしむ可し。只人を恐れしめたる人物は、人をして憐れを催ふさしむべし、不具なる精神は、汝の眼中に、殆ん美を以て映し來る可し。斯の如く肉體の不具を神聖にする父の父たる所は、『ロアザミューズ』中に之を保有し、心靈上の不具を神聖にする母の母たる所は、『リユークレホルツヤ』中に、之を保有す。

之を以て、彼のユルテイニが其戯曲に於て、愛情と義務との決闘を以て惟一の脚色とするに比すれば、固より美を求むるの道に近かしと謂ふ可し。蓋し對比は、美を生ず、青松の間に櫻花を見、烟霧の内に山水を見、青空の中に、明月を見るが如き、皆なその單獨に於けるよりも數層の美を感せしむ。ユーゴーの戯曲は則ち重に此方法によりて、美を求めんとせしなり、然れども、對比は、自然の一部にして全部にあらず、現實の一部にして、全部にあらず、對比のみを以て脚色とするの結果は、自然と現實に遠さかるの憂なしとせず、ユーゴーの戯曲は則ち此弊を免る、能はさりき。去れど、ユルテイニ、ラシンを排斥すると同時にセツキスピヤに摸擬する所なく、只セツキスピヤより假りたる現實の光を照らして、客觀的美を求め、而して半は之を得たるユーゴーのユーゴーたる本色は實に此

に存す。

詩人としてのユーゴー

一

詩人とは、何ぞや。

ユーゴー「内部の聲」の中に歌ふて曰く。

「人民よ、詩人に聽け、神聖なる夢に聽け。彼れ微かりせば汝等の
 夜は全く暗からん。彼れの額惟り輝く。彼れは惟り未來の暗き蔭の
 中に、未だ開かざる嫩芽あるを認む。彼は女の如く柔なる男なり。
 神は、森に語る如く、波に語る如く、低き聲にて彼の精神に語る。
 嫉妬嘲笑の荆棘あるに拘はらず、物語を集めつゝ、零落の中に匍匐し
 て進むものは彼れにあらずや。有益なる物語の中より世界を掩蔽る
 者を出し、天の讚美すへき者を出し、人間と神の思想を出すは彼れ

にあらすや。過去を根とし、未來を葉とする者は彼にあらすや。彼れは光を放て輝く、彼れは其焔を永劫の眞實の上に投ず。彼れは人の精神の爲に驚くべき明光を放つ。彼れは都に、田舎に、王宮に、茅屋に、又た野に山に其光を漲らさしむ。彼れは如何なる高きものにも見はるゝなり、何となれば詩は諸の王と諸の牧者とを神に導く星なれば也。」と。

是れ所謂詩人の職分也。ユーゴーは如何にして、其職分を盡くしたる乎。請ふ吾人をして、その大軀を大觀せしめよ。

十七世紀は佛國文學の花園なりき。「クラシック」の名花は、殆んど總て此時に開きたり、去れどその開けるものは多く、戯曲の花にして、詩歌の花は、遂に開かざりき、路易十四世の時代が、佛國文學に於けるは、エリサベスの時代が英國文學に於けるに相似たるも

のありき。去れど路易の時代には、コルチイユ、ラシン等の大戯曲家を出したるのみにして、唯一の譬喩談の大家、ラフランテンを除くの外、詩界寥寥、エルサベスの時代に於て、セツキスピヤに對するスペインセルの如き大詩人は、遂に現はれざりき。

故に十九世紀の詩界に於ける、「クラシック」の蔭影は、劇界に於ける蔭影に比して、極めて、微薄なりき。劇界にはコルチイユの山あり、ラシンの河あり、之を蹠渉するに、難かりしと雖も、詩界には、只ラカン、ウチアチユルの如き今日に至りて、殆んど名もなき詩人の蟻垤あるのみ。ユーゴーの生涯か、彼に險にして、此に夷なる亦宜ならずや。

讀者は吾人が前に描きたる「クラシック」派の詩人ユーゴーの肖像を記憶せらる可し。去れど之を以て、ユーゴーの眞面目なりと爲

す勿れ。彼れの面目は日毎に變しつゝある也。ユーゴー曰く時は大なる彫刻師なりと、ユーゴーの面目は大なる彫刻師によりて、年々彫琢せられ、今のユーゴーは舊時のユーゴーにあらざる也。

ユーゴーか『クロンウエル』の序言に於て、『クラシック』に宣戦したるより、二年にして、『東方の詩』を著はす。(千八百三十九年一月) ユーゴーか『ロマンチック』派の詩人として、其名を博したるは之を以て始めとなす。

『東方の詩』如何にして出てし乎、其序文は之れに答へて曰く。彼れ『東方の詩』著者は之に向て何の答ふ可きものを知らず、只想像は寧ろ奇なる手段を以て彼れを捕へたり、夏の夕彼れが落日を眺めつゝある時に彼れを捕へたり』と、斯の如く此詩は、夢の如く幻の如く、天來せるものにして、其中に事實又は歴史の痕跡を見ず、全

く想像の産也。去れど其文辭の華麗にして、其用語の斬新なる『クラシック』派の詩を讀むに慣れたる佛人の眼には、一の新世界にてありき。當時の或る批評家は曰く、斯の如く繪畫的にして、壯麗にして、又た齊調なるは、未だ曾て佛國の詩中に見ざる所なりと、或は曰く此詩は華麗にして、神韻ある十五世紀のゴース的建築物に比す可しと。

此の新詩は殆んど一の彈丸を身に受けずして、月桂冠を戴き、十數日にして、七版を重ねるに至れり。『東方の詩』一たび出て、ユーゴーの位置更に一層の高に上れり、當時已に大家の列に加はるべき文學者、亦彼に師仕して、益を受けんとを望めり、ルイブーロンゼー、セントポープ、アルフレッドミュッセル、ペランゼー、ポールアラトセー、エミールデシヤン等の諸文星、皆な彼等の太陽に

來りて、光を受けたりき、當時彼れの地位如何なりし乎は、彼の高足弟子テオフ井ニ、ゴーチエ其翌年ユイゴに面會せし時の實況によりて明らか也。ユイチエ曰く。

余輩は二度目に鉛の履を穿ちたるが如くに重き足を引て、彼(ユイチエ)の階子を登りたるに激動の餘、額に汗せり。余輩は手を門柱に置くに及んで、恐懼餘りに甚たしくして余輩は首を轉し、歴階して急に後へ退けり。第三の企は一層成効ありき。我兩脚の動搖せさらんか爲めに階段の上座したりしが、忽ちにして戸開らけ、フェビエ、アボロン(日の神にして又詩の神)の如くウ井クトルユイゴは立てり。

アスシユエリユイ(メルシヤの王、女后メスチーを廢し國中の美女を集め其の中よりエステルを擇みて皇妃とす)の前のエステル(父なく母よきメルシヤ王の擇に遇ふて女后となる)の如く余輩は忽ち恍然自失せり。……彼れは鄭重に余輩を起こして書齋に導けり。ハイチ(獨逸のローマンチック派の詩人)は語りぬ、彼れがゲーテと面會せんとするに當り、豫め多くの會話を用意したりしかども、大人物の前に出るに及んでは、

シヨナミツリアイマルの間の途上梅樹實を結び、渴したる時その味美なりしを語るの外何をい語る能はず。日耳曼の詩神(ゲーテ)は柔かに微笑いで之を聞けり。余輩亦殆ど此の如くありしよ、余輩の雄辨は啞かなれり。余輩が數夜を費やして組み立てたる贊賛の會話は總て無に歸したりしよ。

ゴイチエは時に二十一歳、已に詩集を出版して、名を顯はしたる者、彼れも亦文學界に聳ゆる一丘陵也、而してそのユイゴを仰き見る此の如しとせば、仰き見らるゝものゝ高亦察す可き也。ゴイチエは且つ當時ユイゴの相貌風采を語りて曰く。

彼れは二十八歳、彼れに於て最も目に立つものは、額也、其額は殆ど大理石の紀念碑の如く彼の靜にして正直なる相貌の上に起立す。其額の美なると實に言ふ可らず。思慮の深遠なることは其中に記され而も黄金の冠又は桂の冠を上帝又はシーザルの如き品位を以て戴くに足る。此の美なる額は後に長く垂るゝ、豊多の栗色髮に縁さられ、額は髻をそり、特に

その顔の青白き色は愁の眼の如く、兩眼の輝きに似りて柔けらる。唇は緊りて決断を示し、微笑して半は口を開く時には愛らしく、純白なる一座の齒を現はす。彼れの衣服は清潔にして汚れたる所なし、且つ黒きフロツ

クコート鼠色のメホンを穿ち、小き襟飾を付けたり。

悲哀の情は時として満足の境遇に生ず、彼れは其地位、其名譽、其生活に於て已に斯の如く。不足なき境に來れり、彼れは其年齢殆ど、過去と未來とを兩つながら俯瞰し得べき人生の半に來れり。多血なるユーゴー、豈に懷舊の悲感に墜たれざるを得ん哉。父たり、夫たり、壯年たり、紳士たるの幸福は、不足なく彼れに來れり、去れど子たり、小兒たる、その幸福は、何くにか行ける。

多情なる彼れは遂に過去の墳墓をあばかざるを得ざりき、墳墓は母を出せり、小兒を出せり。千八百三十一年十一月に出版したる『秋葉』是也。其一節に曰く。

『少時瞬間に去る、吾何の罪かある、汝何すれそ吾を愁の中に捨て、爾かく急き去るや、汝の微笑を見んとして得可らず、汝の翼の上に樂まんとして得可らず、嗚呼我心甚た痛む』

懷舊は、時としては退却を意味す、去れどユーゴーの懷舊は、進歩にてありき。彼れは過去の中に慈母と幼年とを尋ねて悲めり、去れど、彼れは、悲の中に奮へり、彼れは悲の中に進めり、彼れは慈母、幼年を歌ふの詩人より、一步を轉じて時代を歌ふの詩人となれり。千八百三十七年に著はしたる『内部の聲』の序文に曰く。

人若し其聲を有し、天然若し其聲を有せば諸の時變も亦各其聲を有す。著者は常に思らく、詩人の天職は三個の教訓を含蓄する三個の談話を綴て詩歌とするに在り、即ち第一の談話は特に心に語り、第二は聲に語り、第三は精神に語る。

吾人が生活する時代の中に總ての人は此の三者を見出さざる乎、吾人の生活は、此三状態即ち家、野、及市の下に全く含蓄せられざる乎。家は

吾人の心の存する所也。野は天然が吾人に語る所也、市は政治上の騒動を吾人に告ぐる所也。

彼れは斯くの如くして、時代を歌ふを以て詩人の天職となせり、『内部の聲』は、其第一頁に於て、此世紀の大且つ強なる所以を歌へり、その最も精神を凝らしたる『サンラクリメルラン』の如き、『勝利の紀念』の如き、皆な時代を歌ふにあらざるはなし。『内部の聲』は亦社會主義を含蓄す、『一富人に就て』の如きは、彼れの心無くして生き、思想なくして、生き、信仰なくして、生き、只黄金の爲めに生くる所の富者を題目として、社會主義を唱説したる者也。千八百四十年に出版せし『光及蔭』中にも亦社會主義を見る。貧婦を歌ふが如き其聲愈憐れなり、老を敬し、幼を愛するは亦是れ『光及蔭』を一貫する精神なりき。

千八百四十九年以後彼れが政治家としての生涯に入るや。詩人としての生涯は夕日の影のごとくなりき。去れど千八百五十一年拿破崙三世、彼れを佛蘭西より追ふや、彼れは佛蘭西を去りて再び詩人の生涯に入れり。然れども追放後の彼れは、天然の平和と人間の温和とを歌ふ詩人にあらすして、人間の罪惡を審判するの詩人となれり。彼の詩は舊約の詩の如く嚴格なりき、彼の詩は神に近き權威ありき。彼れは、拿破崙三世より放逐せられたる、翌々年千八百五十三年セルシー海濱一小破屋の裏怒濤天を捲くを睥睨しつゝ、『刑罰』なる一の詩集を著はせり。是れ彼れか、拿破崙の反逆に酬ひたる怒の焰なりき。『刑罰』に現はるゝ雷電の如き彼れの怒は如何に天に近きよ。彼れか、『刑罰』中拿破崙の反逆、罪惡を責め、天罰の近ける

を宣ふる所、何ぞミルトンの『失落園』中天使かサタンの反逆罪惡を責め、神の復讐の恐る可きを宣ふるに相似たるや。『刑罰』は譬へは上帝の武庫より賜はりたるミカエルの劍なりき。『刑罰』中『罪惡の仲間』と題とする詩の中には拿破崙三世を宣言して『平民政治の暗殺人』となし、光榮の上に罪を積み、勝利を汚がし、誇榮の日を耻辱の日に變じ、正義、權理、政府を蹂躪し、法律、体面、其他の總を殺ろし、人間の希望すら殺ろし、全く血を以て國を支配するものなりとなし。『最惡なる叛逆』と題する詩中には、拿破崙三世を以て自由と心靈の強盜となし、必ず天罰を受くべきものとなせり。後三年（千八百五十六年）にして、『黙思』ゲルンセーの幽靈屋敷中に著はさる。此の書分て二篇となす、前編は千八百三十年より、同四十三年の間に書かれたるものを集め、後篇は千八百四十三年より同

五十五年の間に作られたるものを集む。千八百四十三年は是れユーゴーの長女レナポルダヌが、其新郎と與に溺死せるを紀念するもの、彼れは心情の段落を以て書卷の段落となせし也。此詩集は著者二十五年間生活の歴史也。その間に遭遇せし困難、經驗、歡樂、憂苦等彼れの心底に沈みしもの總て、之を捕へ來りて、詩中に活現せしめたる也。而してその後篇に至りては、ユーゴーが四十三年以後一日も忘るゝ能はざりし長女追懷の情最も多く其力に流動せるを見る。『刑罰』を読み來りて、『黙思』に至れば、殆も、昨日怒號、舟を呑み、岩を噛み、天を浸し、地を動かしたる大洋が、今日は烟波千里、一望鏡の如く、浮鷗の波上に眠るを見るが如し。前者は、動を示し、後者は静を示す、前者は雷電、暴風、大震也、後者は春風、烟霞、甘露也。兩者并せ觀るにあらずんば、ユーゴーの全面を見る

可らざる也。千八百五十九年の秋同くゲルンゼーに於て著はしたる『各時代の物語』に至りては、ユーゴーの詩の中最も華麗にして最も完全なるものに位す。其序文中に曰く

是等の詩は人間の母、イアの時より人民の母、革命の時に至る迄一代又一代人間の状態を寫せるに外ならず

吾人か此詩集に取る所は、其『ユーマニテ』を發揮するに在り。

『各時代の物語』中にて、最も光彩あり、最雄勁なるユーゴーの作として數へらる、『貧民』の如き『内亂』の如きは最も『ユーマニテ』

の光炳然たるを見る。『内亂』の大意を語れば左の如し。

王の爲めに人民と戦ふたる一人ありき、賤民は彼れを家より街上に曳き來りて、曰く叛逆人を倒ほせ、探偵を處分せよ、強盜を殺るせよ、怒りにいて聞く、一小聲あり、曰く是れ我父なりき。六歳の兒現はれ出つ。賤民は又た王、宰相、僧侶を足下に蹂躪せよ、惡徒探偵總てを殺るせよと叫べり。小兒は、『彼れは我父なり』と呼び、『我父を殺す勿れ』と呼び

たれとい賤民は之を顧みざりき。賤民中最も激發せる者兒に向ひて去れと命し、母の所に去れと命したれとい此兒は母を有せざりき、父より外には何人をも家に有せざりき。父は兒に向て隣家の婦人の所に行けと命せしが、兒は父と同道せされは行かず言ひ、その故を問へば、父が害せられんとを恐るゝなりと述ぶ。父即ち賤民の首領に向ひ、その縛をゆるめ、兒をして害なきを安んじて、去らしめ、然る後に何れの所にも處刑せられんとを密かに願ひたるに、首領は之を許るせり。父は即ち其兒に謂て曰く看よ是等の紳士と余とは朋友として歩む也、安心して家に歸れよ、兒は接吻を求め、安心して去れり。父是に於て己れを殺さんといを請ふ、衆皆此一場の悲劇に動かされて叫て曰く、『汝の家に歸れ』と。老といふ短氣者は、天地の無窮を歌ふ大詩人の上にも酌恕する能はざりき。彼れ躰健、心剛なりと雖、已に年を重ねる六十余。而かも、其少年の十數年は貧苦の中に送り、壯年の十數年は怒罵譏誣の中に送り、最近の十年は流謫の中に送る。彼れ多少の老ひなからん

ことを欲するも得可けん哉。彼れが六十三歳（千八百六十五年）の著作たる『市及森の歌』を讀むものは、亦老山老水の間に一莖の節を立て、前を望んでは、死の海の波高く掀蕩するを見、後を顧みては少年の花、雪の如く野原に散りしき、薰風猶ほ袖を吹くを見て、人生最奥の秘密を解し得たるもの、如く、點頭する旅行者を想像し得可し。彼れ此書に序していふ。

同一の人にて、其人の二個の年代、即ち始まる所の年代と終る所の年代とを對照するは、悲しむ可き事にして、且つ重大の事件たり。前者の希望は生に在り、後者の希望は死に在り。……人心各其始に於て白紙一頁を有す、之に記さるゝものあり曰く『少年』其終に於て亦一頁を有す、之に記さるゝものあり、曰く『智慧』。此書中に見る可きものは、此の二頁なり』

彼れは斯の如くして、一方には人生の夕に立て、人生の朝を歌ひ、

少年の愛情、少年の感情を歌ひ、少年の夢想を歌へり。又た他方には人生の夕より進んで人生の夜に移り、肉の光より進んで靈の光に移り行く悲くして而かも樂しき旅行を歌へり。

彼れの詩は、俠に趨き、義に勇むこと、電光の如くなりき、拿破崙三世、其將をして伊太利の俠雄、ガリバルヂーをマンタナに破らしむるや、『ゲルンゼーの聲』（千八百六十七年）は、隕石の如く地上に落ちたり。自由は喝采せり、獨立は拍手せり、伊太利は感謝せり、ガリバルヂーは踴躍せり、而して拿破崙三世は震慄せり。若し夫れ拿破崙三世を倒ほしたる勢力の淵源を尋ね來れば、『刑罰』と『ゲルンゼーの聲』とは、各々一方面勇將の功ありと謂はざる可らず。

三世倒れ、ユーゴー歸るや、間もなく、『恐る可き年』と題する詩集を公にせり。

暗澹たるパピロンの谷間に瓦石の落々として散在するを見て、その一石片磚も、光榮の歴史を有せざるはなく或は天を貫くの高塔たり、或は雲を凌ぐの大樹たりしを沈思して、悲壯激越の感に勝へざるが如きものは、『恐る可き年』也。曰く『セダン』曰く『降伏』曰く、『穢かれたる巴里』曰く『條約決定前』是れ等は、『恐る可き年』の中に含有せる詩の題目にして、一として、血涙の凝塊たらざるはなし、その『條約決定前』と題する詩中の一節には左の如き悲壯の意義を有す。

我古來の光榮は汚され、
 何の面目ありて生く可き。
 敵は我城塞の中に在り、
 我人々を蹂躙して、
 後ダニユーナ河畔に住せし勝利者にして、
 所の佛蘭西にあらす。

普魯西と佛蘭西とは敵國也、我暗き日蝕は、彼等の喜ばしき朝也。我墳墓は彼等の希望也。嗚呼破船！雄大の功勳忽焉として逝きぬ。彼等は我國旗に向て叫て曰く腹痛者よと、而して又た我大砲に向て叫て曰く彼等は恐縮せり。我等の辱罵、我等の希望は總て逝きぬ。嗚呼神よ佛蘭西の斯の如き平和の淵に墜落するを許す勿れ。

此の大詩人は千八百六十七年には孫を有するの身となり、千八百七十七年には、數多の孫女に圍まれ祖父と呼べる、身となりぬ。去れど彼れは大なる小兒也。彼れ或は、草の上に座せるヤンと與に、蟻を見て、語り、天を見て遊び、或は、セオルチを膝に置きて與に俱に天上の月を弄び、或は孫兒が夢の邦たる搖籃の中に眠れるを見て、其紅の頬に接吻す。此の如き優和の境遇は、彼れをして、『祖父たるの法』(千八百七十七年)を著はしむるに至る。此詩集に見る所、總て、孫に對する愛情、小兒の自然及人間に對する天真を描ける者

也。

死の影は、簷端に來れり。彼れは已に殆んど八十に乗んとす、去れど老詩人は、其天職を守りて、休するを知らず、千八百八十一年を以て『精神より出る四個の風』を著はせり、是れ實に彼れが死したる四年前にして、彼れが生前出版したる最後の詩集なりき。若し之を最後の詩集として讀む時に、最も人を動かすものは、『岩邊の散步』と題する詩也。吾人試に之が意義を紹介せん乎。

日傾きて、夕は急き、地平線に色をなす。石の上には餘命少き老人ありて樂しげに座す。其眼は四の方に注けり。老人は、音類を山に放養する牧畜者。音は若く、食かりし者。陸影、山を掩ふて廣かる時には彼れが吹く笛は森に響きて面白き音楽をなす。今は富且つ老ひて、大なる家族の主長たり、彼の精神に満つる者は過去ののみ。牧畜岡より歸り集れば彼れは地を忘れて、只空のみを眺む。終の

日は、始の日に傾す。老人は蒼然たる天色の下に蒼鬱を默思す。茫々たる大洋は彼れの眼下に横はれり。殆も死の門に横はる善人の希望の如く、嗚呼莊嚴の景。猛き海や、岩や、風や今は黙して其叫を止めぬ。老人は落つる所の日な眺めつゝ、日は死する所の人を見つめつゝ、已にして太陽は全く西に没せり、暫くして詩人は全く墓に没せり。

三

ユイゴの佛國詩界に於ける、總ての方面を革新せり、彼れの詩は全く新詩なりき。彼れの詩は、彼れが創作せし一個獨特の詩、即ちウヰクトルユイゴの詩集として、今ま猶ほ文學界に尊崇せらる。彼れが、譬喩の天地を新にしたるは、亦大なる功勞也。從來譬喩の天地は、未開なりき、狹隘なりき、陳腐なりき、彼れは新なる光を此の天地に與へたり、彼れの詩は、實に新譬喩、新比較を世に

陳列する一大寶庫といふ可き也。
 彼の詩は、赤心の同情なりき、彼れ一たひ母を思ふ時には彼れは、全く母也、彼れ一たひ兒女を思ふ時には、彼れは全く兒女也、彼れ貧民を思へば、彼れは全く貧民也、彼れガリバルヂーを思ふ時には、ガリバルヂーか自ら感ずるか如く感ずるを得、自ら思ふか如く思ふを得、全くガリバルヂーと一致するなり。彼れ天然を思へば、彼れは天然と一致し、彼れ人間を思へば人間と一致す、彼れは皇天が、見ずして見、聞かすして聞く所を同情を以て見、同情を以て聞く也。之を別言すれば、慈母が惟一の同情を以て嬰兒の一笑一泣の何の意味する乎を解するか如く、エーゴイは同情を以て天地万物の意味を観る。是れエーゴイの詩也。
 之を概言すればは拉典の文體を化して其形跡となし、日耳曼の思想を

化して、其血肉となし、ウヰクトルエーゴイ彼れ自らの良心より出る同情を以て、其精靈となすもの、是れエーゴイの詩也。
 コーペー曰くエーゴイは詩人の中に於て、最も多くの譬喩を發見せる者也、彼は總ての時代の中最も大なる詩人なりと。エーゴイを以て、詩人の中最も多く譬喩を發見したるものとするは當れり。總ての時代の中最も大なる詩人とするは誇大に過く。彼は世界に於ける最大なる詩人の一人なるに相違なし、去れど彼れを以て總ての詩人中の最大なる者となすは彼を賛して却て彼れを傷くる者也。只夫れ佛國詩人を以て彼れに比すれば、彼れは總ての詩人中の最大なるものと謂ふ可き也。ラマルチンは大也、去れど雄勁華麗の點に於ては彼れエーゴイに及はさると違し、シヤイトーブヤンは大也、去れど直覺的想像方に至りては、彼れエーゴイに一步を譲らざるを得ず。

フアークがウヰクトルユーゴーを評して『ラファンテンと共に佛語を以て歌ふ所の最大なる音楽家なり』といふもの穩當にして度を得たりと謂ふ可し。

小説家としてのユーゴー

一

佛蘭西、其小説を有して、五百年、其間に作られたる小説は積んで以て、アルプス山の頂に達す可く、埋めて、以て來因河を徒渉す可し。去れど、其小説たる、十七世紀以前は、殆んど譬喩的、英雄的の小説にして、十七世紀は、譬喩的、心理的なりき。十七世紀以前の小説は概ね西班牙小説の摸擬にして、十七世紀の小説は概ね英國小説の摸倣なりき。佛國が自國の小説として他人に語り得べきものは、十八世紀以後に在り、十八世紀の小説は、ホルテールより流れたる哲學的小説其主にして、ルソーより發したる感情的、心理的小説之れが客也。哲學的小説は、千八百九十三年の革命前迄行はれ、

革命の際より感情的・心理的小説之に代はり、十九世紀の前頭に於て、猶ほ餘威を振へり。クールドテ夫人の『ベレリー』(千八百四年)、ベンヂヤミンコンスタンの『アドルフ』(千八百十六年)の如き皆ルソーの血統を受けたる感情的・心理的小説なりき。此種の小説は小説に托して、哲理と心理とを説くものにして、實在と相隔つる事甚だ遠かりき。

小説界には、戯曲界に於けるが如く、『ロマンチック』派の強敵あらざりき、若し敵ありとせば、此の感情的・心理的小説は其者なりき。

『ロマンチック』派は、此の敵を滅ぼさんが爲めに歴史的小説を作れり。メリチの『シヤレス九世時代の史談』(千八百二十九年)バルザックの『レシヨアン』(千八百二十九年)、ウ井ニ一の『サンマー

ルス』之に次で現はれたれども、其小説は、半ば空想的、半ば歴史的にして、猶ほ實在と相恃ると少なからざりき。是の時に於て、エーゴの歴史小説『ノートルダムダバリ』出づ。

彼れは『ノートルダムダバリ』を作る前に三箇の小説を作れり、曰く『バクシャルガル』、曰く『ハンヂーランド』曰く『死刑者最後の日』。前二者は、歴史小説に似て非なる者也。第三即ち千八百二十九年に作られたる『死刑者最後の日』に至りては、情深く響き、一文亦華麗、後年の作『クロードキニ』に比して、却て勝るものありと雖、彼れか『ロマンチック』派小説家として天下の職認する所となりし新生涯は、實に『ノートルダムダバリ』より始まる。

エーゴ『ノートルダムダバリ』の出版者に告ぐるの書中に曰く、是れ十五世紀の巴里を描寫せる者也、巴里に關する此の十五世紀を描寫

せる者也、此書は全く歴史的ならざるも、十五世紀の道德、信條、法律、美術、文明には多少の光を與ゆ可し。

此書は、ユイゴの所謂過去を描て、學術的に詳細に、生活を描て詳密なる解剖に至れるに近きのみならず、歴史の眞理と小説の眞理を包有するものにして、一讀し來れば、十五世紀前の僧侶、鐘撞、士官、舞女、詩人によりて、永劫の「ユイマニライ」の明らか表彰せらるゝを見る也。

彼れか「ノートルダムドバリ」を草するや、千八百三十年七月の革命は正に怒濤を揚げたり。彼れは、殆も荒らしの中に漂へる船室に閉居せるが如く、シヤイレスの末運にも、ターレーランの隠謀にも目を閉ちて専心一意小説を作りたり、ユイゴ夫人語りて曰く。墨一瓶と首より趾迄を蔽ふ爲めに大なる毛織の衣を買い、他に動き行くの誘惑を避くる爲めに、衣服を以て緊く身を包み、殆かも囚人の如く

して其小説を作れり。……彼れは眠食の外、案頭を離れず、彼れが只くつるぐの時は盤食の後一時間、二三の友人と談話し、時としては彼等に其日々草せる所を讀みきかせたるのみ……彼れは其の入牢を始むる時には甚た憂鬱の色ありしか、始めの二三篇を草するや、憂鬱は去れり、彼れは心を著作に奪はれ、疲勞と寒氣を感せず、十二月には窓を開て著作せり。

斯の如く數ヶ月の苦行難行は、「ノートルダムドバリ」となりて世に出つ。是れ實に千八百三十一年一月十三日なり。その世に出るや毀譽紛々雨の如し、難するものは曰く。是れポルテールの「メロツプ」の抄本のみと、或は曰く母か娘を發見するをもて全篇の骨子となす、更に斬新なる所を見すと。サントポープは曰く、「其文跡輕快自在言はんと欲する所を言ふ」と又曰く「永久不滅の大紀念碑なり」と。最も批評眼ある「ユイールヂヤナン」は曰く「ノートルダムドバリ」

は力あり、穿ちたる著作にして、讀者の心に苦しき覺の如き恐るべき感覺を残す、著者の作中に於て、最も彼れの才力、不撓沈着の氣象、御す可らざるの意思の發現したる是に過くるものあらず」と。

當時シャートウフンリヤンは、六十三歳の老年と、政治上の失敗とにより、又た文學上の勢力にあらず、ゲーテは、八十二歳の翁、死の蔭は已に一年の後に迫り、賞賛を以てユーゴの處女作を愛讀したる彼れの眼は、今ま『ノートルダムマリ』を讀んで、『厭悪すへき書籍』なりと評する程に暗くなりぬ。バイロン已に死して、七年、スコットは、正に中風に懸りて、死の車は、亦一年の後に彼を迎へつゝありき。アレキサンデルチエマ、マコレー、コレリツヂ、ナルツウナルス、アルフレッドミユツセ等の文星は猶ほ各其光を放ちたりと雖、彼等の文名は未だ歐羅巴的のものにあらず、當時彼等

の文名を以て、バイロン、ゲーテの文名に比すれば是れ殆も熒火の星辰に於けるが如きものありき。

文學界の狀態此の如し。故にユーゴの頭上には、只蒼天あるのみ、一の障礙あらず、一の競争あらず、佛蘭西的の文名より、歐羅巴的の文名に進むは、大道を走るか如くなりき。此時に當て、『ノートルダムマリ』出つ、彼は忽ち歐洲全躰を俯瞰すへき巨人となれり、ユーゴの名はバイロンスコットゲーテと併び稱して耻かしからぬものとなれり。

『ノートルダムマリ』は、二冊より成り、七百餘頁の大文字也。

今ま其大意を摘抄すれば左の如し。

エスメラルダ名くる天使の如く清く、花の如く美しく、鳥の如く歌ひ且つ舞ふ小女ありて、彼女は戀の中心となれり、『ノートルダムマリ』寺の副法教師、クロードフロロ先づ陰かに彼れを思ひたり、『ノートルダ

ム』の塔の上より彼女の舞を眺むるを樂みさせり、次に哲學者として又た戯曲家たる副教師の弟子たるクリンゴアル亦彼女の美に動かされ、夜中獨行せる彼女の後を追ひしが、忽ちにして二個の人物暗中に現はれ、彼女を抱き去らんさす、彼れ之を救はんさせしが、その一箇人物は、彼れを地に投し、人殺し連呼せる舞女を抱き去らんさするに當り、殆もよし騎馬の士官此に來り、其の舞女を救ひたりしか、舞女は其名を請ひ問ひ、士官のホツピユスドシャトーバルなることを確かめて、彼女は急に逃れ去れり。而して此の舞女を捕へ且つクリンゴアルを投げたる人物は『ノートルダムドパリ』寺の鐘つきにして、他の一人物は、副教師にてありき。

クリンゴアルは埃及人、チユニス人等の住居せる一種の街衢に迷ひ入りて、殆も殺るされんさする時に、舞女來て其の命を救ひ、彼れをチユニス人の所謂一種の夫さなせり。去れは是れ只生命を救ふ爲めに斯く名義を附したるものにして、小女は、少しも此の哲學者を愛せず、去れは彼女には頭に兜を戴き、手に劍を有して、彼れを救ひたる士官其人の名を忘るる能はず、彼女は、人知れず、其愛する羊に向ひ文字板を以て、ホツピ

ユスの文字を綴る可く教てありき。副法教師は、學術に一身を委れたる嚴格の人なりき、彼れは其弟ジャンを愛養すると同時に、天然不具の兒、眼は一方潰れ、背は駱駝の如く、腰し、其足は曲りて一足他より短きたる一子を養ふ、是れ即ち鐘撞カシモドなり。彼れは鐘をつきしが爲めに又た聲さなれり。舞女は、レイムの一婦人が外出せる間に埃及の乞食が之を奪ひ來りたるものにして母は今ま巴里に來りて其女を求めつゝありき。カシモド鐵枷に繋がれ、群衆に笑はれ、耻かしめられ、苦しめられ、疲れ衰へ、瀕して、水を求むるに至り、群衆は益々之を嘲笑するに當り、舞女來りて、彼れに近けり、彼れは、前夜彼女を捕へんさしたるに復讐するならんさ恐れたり。彼女は、水を彼れに與へたり、彼れの眼は、大なる涙を流じたりき。副教師は、クリンゴアルを會したるによりて、舞女に一の秘密あるを知り、其羊が綴る所の『ホツピユス』なる文字は必ず人名ならんさ疑察し、其の弟ジャンによりて、ホツピユスはジャンの友にして、士官にして又た舞女と密會する迄愛の成立せるを知り、ホツピユスが舞女と密會する

に當りて、嫉妬に驅られ、短劍を以てホツピユスを撃ち、失神せる舞女に向て、熱鐵より暖なる接吻を興へて、知らざる真似して逃れ歸れり。僧侶の戀は、驚く可く執拗なりき、彼れは、火の接吻に満足せず、更に彼女を以て殺人罪を犯せる者となし、獄に投し、生殺の權彼れに存するを示して、戀を達せんとして、縋々として情を脱きたれども、彼の女は其戀人ホツピユスを殺したる者の彼れにして、己れを獄に投したる者の彼なるを知るが故に、却て彼れを妖怪なりと罵りて聽かさりき。彼女死刑に處せられんとするに當り、副教師、彼女に引導を渡し、ついで彼女を救ひ得るとを告げて、戀を送けんとすれども、聽かず、彼女は一念ホツピユスを思ひホツピユスを叫びたりき。

彼女正に刑に死せんとするに當り、カシモド現はれて、彼女を肩にし、中古時代の避難所たる『ノートルダムマリ』寺に彼女を移して、其命を救ひたりき。

ホツピユスは傷きたれども死せざりき、彼れは、已に他の婦人と結婚を約したり、彼れは、婦人と共に『ノートルダムマリ』寺に來り、舞女に認められ、カシモドは舞女の爲めに、彼れを招きたれども、彼れは舞女

を命するを肯んせざりき。

副法教師は、舞女の寺中に在るを知るに及んで、彼女をカシモドとの關係に對して、嫉妬の煽を燃やし、一夜彼女の許に來りて追り、殆んど危きの時にカシモド、來り會して其目的を達する能はず。

チユニス人埃及人等の乞食等は、舞女の『ノートルダムマリ』に在るを知り、腕力を以て之を奪ひ返さんと試みたり、路易十一世は之を以て、王の保護の下に在る『ノートルダムマリ』を攻撃するは、王に反對するものなりとなし、總てを殺し盡すとを命し、寺院の保護を破りて、寺中の舞女すらも之を殺るとを命せり。

副法教師は、クリンエアルと興に、舞女を寺より救ひ出し、更に火の涙を流して、只一言親切なる語を發し、呉れよと口説きたれども、彼女は愈々彼を恐れ、愈々彼を惡みて従はざりき。

副法教師は、十五年の間、子を尋ねて殆んど狂し埃及の婦人を見て、其肉を喰はんとしつゝ、路傍に幽居する一老婦に向ひ、此の埃及婦人を見、其て、復讐せよと告げ、且つ彼女を捜しつゝある王の兵卒に向て、彼女の此に在るを告げたり。

此老婦は、彼女の母なりき、彼等は再會を喜ひたりしが、間もなく、王の兵卒は、彼女を老婦より奪ひ去り、老婦は抵抗して殺され、彼女は刑に殺されんさす。

副法教師は、寺に歸り、塔の上より彼女の死を眺めつゝありき、カシモフは牝を失ふたる獸の如く彼女を尋ねつゝ、又た塔の上に来て又た彼女の刑に死せんさすを見るを見て、悲み悶へたり、副法教師は只人間にあらざる人より來るへき笑を發して其死に近くを打眺むるヤカシモフは、法教師を高塔の下へ衝き落せり。

其夕碎けたる副法教師の死骸を收めたる時には、カシモフは此寺より何れにか姿を隠しぬ。

一年半の後、他の刑死人を洞窟に投ぐるに當り、舞女親子の死骸の側に刑死の跡を見ざる一人の男子死してありき、其一の足は他よりも短くありき。

千八百三十四年『クロードギエー』と名くる社會的小説を『巴里雜誌』に公にす、其大主意は左の如し。

巴里の職工にクロードギエーなるものあり、職業なく、食物なく、薪炭なく、妻子饑餓に泣くを見るに忍びずして、盜賊さなれり、盜賊の結果は妻子には、三日間のパンと薪を與へ、彼れに五年の入獄を與へたり。獄中に於て、彼れは食物の不足を感じたり。十六歳の少年ありて、食を彼に頒ちたるを以て、彼れは飢へざるを得たりき。兩者の間には、父子兄弟の如き愛情成立したり、無情なる監守は少年を彼れより奪ふて他のに移したり。

クロードは監守に向ひ町噂反覆、少年なくして活くる能はざるを告げて、少年を返さんとな請へども頑として聽かず、クロード即ち決心する所あり、十日間の熟考時間を監守に與へて、反省を乞へり。其の期日に至るも、監守は、少年を返さざりき、クロード即ち獄中の工作場に入りて、斧を借り置き、監守の來檢を待ちたりき、監守來るに及んで、彼れは拜むが如く、訴るが如く彼れに少年の返還を懇願し遂にその聽かざるを見るに及んで、斧を揮て之を殺せり。彼れ剪刀を以て自殺を計りたれども、傷淺くして死せず、彼れは裁判官に向て、『余は何故に殺したる乎』『余は何故に盗みたる乎』の疑問を呈出したれども、裁判官は答ふる能はず、

只死刑の宣告を彼れに與へたりき。

是れ『死刑者の最後の日』と與に、彼れが胸中に鬱積せる社會主義の火山脈が破烈せんとして未だ破烈する能はず、只斷隙を求めて、時に烟を吹きたるものにして、與に是れ社會主義の『悲慘』に通ずる伏脈といふ可き也。

是れより後、二十八年間彼は、戯曲を作り、詩を作り、政治論を爲し、革命を促かし、罪惡と戦ふに忙はしくして、彼れは又た筆を小説に染めざりき。去れど久く鬱積せしの結果は、一大火山となりて破烈せざるを得ざりき。

二

グルンゼーに一樓あり、天井四壁張るに玻璃を以てす、仰ては以て、青天、日光、星辰を觀る可く、俯しては以てセントサンブサン

の繪くが如き海角、蛟龍の如く、水天相連なる所に透迤たるを見る可し、其中に一個人物あり、頭上霜を戴き、額上波を浮へ、眼光、金星の如く輝き、鐵筆、手に從て走り、紙上雲烟を生す。黒痕を印せる紙片は、片雲の如く、安樂椅子又は煖爐の上に散點す。是れユーゴーが書齋に於て、一代の傑作『悲慘』を作るの光景にてありき。

『悲慘』はプレスロワイヤルに於て、稿を始め、千八百四十八年には其一部を出版したれども、政治上の事故の爲めに完結を妨げ、千八百六十二年に於て、オートウ井ユの宅に於て、完結せり、その書の十九世紀の一大産物たるか如く、その世に公にせらるゝも亦、世界的なりき。巴里、倫敦は勿論、白耳義のブリュッセル、伊太利のミラノ、西班牙のマドロット、和蘭のロッテルダム、匈牙利のベス、伯

西爾のリイヤチロ等同時に出版せられ、數万部は幾週ならずして、賣盡されたり。ユーゴー曰く、此書は世界の總てに讀まれたるや否やを知らずと雖、總ての爲めに作られたりと。此書の光は實に太陽の如く普く照らしたりき。アルフレッドポは魯國に旅行し、半ば韃靼人の住地たるカザンの小市中に、魯語に譯せられたる『悲慘』あるを發見して、一驚を喫したりといふが如き、南北戦争の際兵士か其糧囊の中に英文に譯せる『悲慘』を擔ひ、篝火に照らして之を讀みたるとのリ將軍の姪女によりて證言せらるゝか如き、如何に此書か天下を風動したるかを伺ふ可き也。

『悲慘』はユーゴーか生涯の絶頂を意義す、獨り小説家としての生涯の絶頂のみならず、文學者としての彼れの生涯の最高點に達したるを表彰す。『クロンウエル』『エルナニー』『マリオンドルム』『東方の』

詩『秋葉』『光及蔭』『ノートルダムドバリ』『小拿破崙』等によりて、一步一步進みたる彼れの位置は『悲慘』により、更に一等地を進み、當時の文學者として、當時の世界の最大なるもの、最も著名なるものとなしたるのみならず、十九世紀の著作家として最大なるもの、一に數へらるゝに至らしめたり。

『悲慘』は八冊より成り、殆んど二千頁に近き大冊子也。『ノートルダムドバリ』に比すれば、其の描寫する所一層精細也、一層實際也、一層自然也。其或る部分は儘かに『ロマンチック』派より現實派に向て一步を進めたるを見る也。其大要を抜摘すれば左の如し。

新にアリに來りし大教正、其名をミリエルといふ、一万五千フランの收入中、一千フランを自個の生活費として、其他一万四千フランを慈善教育等公事に寄附し、其妹と其老婢と與に暮らせり。千八百十五年十月の始め、四十六歳乃至四十八歳に見ゆる一人あり、日没頃、テリ町に來れ